1981

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十四年九月一日發行（毎月一回一日發行）

京城雜筆

永樂町人 編輯

九月號

〔第七十九號〕

發行所 臺灣瓦斯株式會社

向上靴

紳士向
學生向
女學生向
各種

向上靴は彼の有名な教化事業向上會館産業部の製品で御座います、事業の性質から『正しき製作』と『正しき材料』とに依つて作られ、之に『正しき價格』を付して賣られて居ります、何卒御試用の上御批判を給はり度存じます

京城南大門通り

向上靴
一手販賣店
丁子屋洋服店

電話本局
長二四二
六四二
九二二
〇九〇三
番

休日なし毎日夜九時迄營業——御用の節は店内クツ部御呼出被下度候

九月號目次

（大體原稿到着順に依る）

主義者と俠客……寺尾組　寺尾猛三郎氏
兵隊さん……朝鮮新聞社　野崎　眞三氏
小　話……覆審法院　伊藤憲郎氏
平壤漫筆……東拓支店　佐々木久松氏
九州所々……松田學鷗氏
少女風葬の記……內田竹三郎氏
原稿難……李王職　篠田治策氏
米國の苦悶……總督府醫院　伊藤正義氏
ひとり言……京城日報　丸山幹治氏
▲初對面の尾崎東拓理事……A B C
▲應接室の住井三井支店長　雲　万　里
獨逸人……京電會社　見目德太氏
御前會議……漢城銀行　李淵雨氏
財界ひとり言……京城日日　別府八百吉氏
林間生活……西崎鶴太郎氏
生ける屍といふもの……朝鮮公論　石森久彌氏
▲初對面の河內山社長……白玉山
▲涼風一夕『本町小話』……行路樹
無題……東拓會社　尾崎敬義氏
雜詠……笠原要太郎氏
途上偶感……商業通信　西本量一氏
東京雜記……前田昇氏
青虫……殖産銀行　金谷要作氏
敬慕の人々……東拓會社　志村四万一氏
▲漫畫『東拓の人々』……山崎義行氏
金剛山ハガキ便り……朝鮮鑛業會　德野眞士氏
▲僕の見た京日雜感……白晝夢
▲近ごろの新聞醫見……江渺々
散歩……總督府醫院　廣田康氏
洪水の歌……野田醬油　市山盛雄氏
三人を羨む……京城日報社　河西喜雄氏
或夜の感銘……本町西京屋　安達清太郎氏
▲漫畫『守屋氏と堀內氏』……笠原文夫氏
敗者の愚痴……元『趣味の世界』主幹　久保田卓治氏
古陶雜感……淺川伯敎氏
▲財界漫語……一水生
勞農聯邦の表裏……廣江澤次郎氏
水難前後……鐵道局　佐藤作郎氏
▲住井三井支店長論……西海漁郎
ほこり叩き……朝鮮ホテル　伊藤龍氏
詩學古典抄錄……古城梅溪氏
相……永樂町人

雜題

編輯室漫筆……雜筆社　石川利夫
或る日の勸業信託……金芙蓉
操觚界の元老諸君……KOK
飛入り『兩雄碁戰』……一兵卒
組上の人『松原さん』……浩々吟
家の話、貧乏の話……雜筆社　平田久雄
世間人間覺え帖……雜筆社　吉田莊一
頰杖ついて……雜筆社　平田久雄
財界漫語……一水生
面影帖……雜筆社　吉田莊一
編輯後記……編輯同人

主義者と俠客

京城寺尾組　寺尾猛三郎

◎主義者と俠客は丁度牧師と坊主みたようだ。一寸見ると違つて居るようだが、考へて見ると實によく似た點がある。どう云ふ譯か僕はバクーニンを思ふと、きつと國定忠次を聯想する。素より僕は二人共懇意ではない、關東の大親分としての忠次は講談師に紹介せられ、無政府主義者の父としてのバクーニンは新聞紙上で名を覺へた位なものだ。が似たところがあると思ふ。それからマルクス、ベルンスタイン、クロポトキン、レーニンなぞを、幡隨院長兵衛、清水の次郎長、新門辰五郎なぞと組ませて見る。其番附たるやなかなか興味津々たるものである。無論日本の連中も田舎の小親分に較べて見る、そして思はず微笑するのである。

◎バクーニンでも忠次でも、官憲に追はれては所を賣る、所謂る國越へをして他郷の仲間に世話になつたりなられたり。餘炎りが冷めると又歸つて來て暴れる。不撓不屈一生おちおちと寢食も出來ないが、悔ゆるどころか名譽と思つてゐる。其眞劍な點がよく似てゐる。露國の官憲と八州の捕方、西比利亞と赤城山なぞも面白い。主義者と根本の思想は違ふが、忠次も時々强慾な富豪の財布を奪つて貧乏人に施してゐる、そしてそれを立派な行動だと思つてゐるところも殆んど同じだ。牢にブチ込まれる流される隨分酷い目に逢ふ、其際同志が涙ぐましい友情を示すちよいちよい女が出て來てローマンスが舞臺を彩る。出て來るか逃げるかするたびに、名聲が揚がる男を賣る、仲間に重んぜられる、繩張りが擴がる原稿が賣れる。そして自分も食ひ坤兒も養ふ。

◎バクーニンに長脇差をブツ込ましてて關八州を横行させても、忠次の眞似は出來なかつたかも知れぬが。忠次に學問があつたら隨分勝手な熱を吹いて、賭博を禁止する法律は人道に戻ると云ふような哲學上の意見でも發表することだろう。そして同志の士が世界の隅々に迄正義（？）の叫びを揚げて響應することだらう。何れにしても物騒千萬な連中だ。

◎幸德の妾だつた菅野始め野枝だの眞柄だのと云ふ女流は、どうせ理想も主義も判るものではない唯父だとか色男だとかにかぶれたに過ぎない。若し百年前に上州あたりで生るれば、忠次や圓藏の妾にでもなつて俠客の味を覺へ。生きては姐御と崇められ死しては講談師の米櫃となつたであらう。惜しいことだ。その野枝がゴールドマンに私淑して居つたと云ふから恐れざるを得ん。特に結婚制度が婦人を束縛する爲め罪惡を生ずるのだ、かゝる制度は打破して野合勝手次第たるべしと云ふ說には、大共鳴してゐる。本人は言行一致で示して居るから間違はなかろう自分は好からうが神近市子は困る

◎忠次等も惡代官にこそ肉を喰しられ骨を碎かれても容易に屈しなかつたが。今の日本の主義者、丁度賭場の走り使をする三下た奴格の連中が、嚴肅なる法廷に傲慢不遜の態度を示して勇名を賣り得るのは偏へに聖代の難有さだ。忠次地下にセゝラ笑つて曰く、小僧共賣道具でもあつて見ろ、見ただけでもグーの音も出るかと。

◎異つた點も大にある。彼には多く學問がある、此れには減多にない。一は陰柔執拗にして女性的だ、一は豪膽無敵で男性的だ。主義者が猾智な老狐なら、俠客は勇壯な猛犬だ。そして兩者が氷炭相容れないのは、根本的思想の相違だ。今此兩者は相對峙して抗爭してゐる。何れが勝つか其結果は、牧師と坊主の喧嘩とは譯が違ふ。俠客諸君に、忠次以來相當世間に御迷惑を掛けてゐる罪を一擧に償ふて餘りある、賢悟ありや否や。

◈江湖風聞錄

平田久雄

齋藤總督は、ほんとに朝鮮の風士人文を愛して居られ、長くこの地に永住せられるお心持があるといふ▲それから令夫人も健康上、仁川がお好きで、既に多くの家具類を、東京本邸からアノ仁川別邸へ移して居られるといふ▲官にあつても、野にあつても、畢竟朝鮮の父として暮されるつもりらしい▲立派なことである

貧乏人に施してゐる、そしてそれ　恐れざるを得ん。特に結婚制度が　立派なことである

京城雜筆

兵隊さん

朝鮮新聞社　野崎眞三

◎

三十六の後備兵が炎暑酷熱の七月、烙き付ける烈日の下に練兵場で右向け右！、左向け左！、決して樂なものではない。

それでも七月一日騎兵第二十八聯隊に入隊してカーキ色の軍服に著換へる、ユキタケの合はぬ軍服姿に御互が顏見合せて子供らしい微笑を交はす。九文七分の足袋に對して十二文甲高の長靴を頂戴しては微笑が微苦笑に變る。

聯隊長大野史郎中佐の訓示があり晝食、午後は早う徒步教練の練兵、汗がダク〳〵流れる、全く暑い。

◎

軍隊名物のビンタは最近根絶したらしい、四週間軍隊に起臥してゐても彼の寂びしい餘韻のあるビンタの音は遂に聽けなかつた。ビンタが無くなつてからの兵隊サンには彈力性が無いと云ふ人もあるビンタなんて私刑の存在は許されないのが當然である。次がビンデーだ。婆婆では南京虫と稱しビンデーと稱するが軍隊では寢臺虫と云ふ。此奴が我々豫後備の應召員は味が良いのか入營第一夜から燈に喰はれる。軍隊自身でも隨分驅除に努めて居ると云ふが、ビンデーの猖獗は全く想像以上であつた

◎

軍人は一樣に軍備縮少が不合理で國家存立上、軍備充實は一日も等閑に出來ぬと高唱する、平和を愛好するが故に軍備を整へるのだと力說する。ナルホド軍備縮少は流行病かも知れないが世界の大勢とあつて止むを得まい。軍備縮少とは現役軍人を激減し最新兵器の研究製作に沒頭する意味だと思ふと軍人は悲觀せずに良い。然し軍縮の聲で現役將校は此一箇年進級昇進絶無だと聞けば軍備縮少反對にも無理はない。

◎

或る軍人は忠孝信義を無條件に信ぜよと云つてゐた。無條件に信ずる事の力强さは想像以上でゐあるが今日の靑年に無條件で忠君愛國を說いても駄目だ。寧ろ理解の上に忠君愛國を强調したい。と同時に階級意識の不合理性を改善し軍隊は光輝ある國民學校としたい

◎

戰爭の樣式が遂年變化し、飛行機、戰車等の新兵器が出來て十五六年前の兵隊サンは吃驚した、コンナに改正亦改正ではイザ戰爭の場合に果して役に立つだらうか。大丈夫命が惜しい自然に戰爭の樣式は工夫が出來るものだ。其上に日本人には特有の大和魂と稱する自己陶醉がある、自己陶醉ぐらい民衆を支配するのに强力なものはないと思ふ。

◎

ドイツの或る母親は子供が散兵壕を掘つて戰爭遊戲の最中に、其散兵壕に踏朶（足の踏みかけ場所）がないからドイツの散兵壕でないと教育した。日本の或る男は子供の玩具に刀や鐵砲を持たすのはミリタリズム教育だと考へて玩具箱を引繰返して鐵砲、サーベル、刀をミンナ折つてしまつた相ナ。日本とドイツの對照として興味あるエピソードですワイ。

◈無駄ばなし

石川利夫

◎朝鮮土地の末森氏は、一寸毛色の變つた實業家である、南大門通二丁目に、朝明舍といふ硝子舖を經營して居るが、毎年夏期になると、店の人に半月の休暇を與へしかも海水浴を慫慂し、そしてその旅費、宿料、小使までも支給して居る、こんな店が、京城のどこにあるだらう、しかも感心するのは、おん大自身は、決して避暑にも、避寒にも行かず、私はこの通り頑健ですからと、朝も早くから關係事業先を廻つて居る。

◎中川湊さん、浩嘆して曰く、どうしてうちには頭の惡いものばかり揃つて居るかな、事務員でも女中でも、そのおの〳〵の仕事があたり前にさばいて行くことが出來ぬ、どうも困つたものぢや……

◎或人曰く、頭がいゝ、その上に氣の早いのが中川君の特色ぢやないか、あの調子でやられたら少々頭のいゝ者でもフラ〳〵になる

小話

京城覆審法院　伊藤憲郎

一、小切手

S門の外は閑靜な町續きであるどつちかと云へば、恩給取りか一寸した物持ちの隱栖者が多い。

魚屋『今日は！』

通行人『やあ！景氣はどうかねこゝら邊は君んとこの本城だらう、拂ひも奇麗だらう！』

魚屋『おかげで……ぼつ〳〵……（聲を秘めて）時に先生！どんなもんでゲショ、小切手チウものは金高に制限はありませんですカイナ』

通行人『それあ、君、制限なんかないだらう、一錢でもよからうが、どうしてだネ』

魚屋『いや、そのなんですよ、この少し先きのお宅で毎月のお拂を小切手で貰ふので大弱りです』

通行人『結構じあないか便利で確かで一番いゝじあないか』

魚屋『先生、冗談じあありません、五圓六圓少ないときは二三十錢、銀行へ行つて待たされる待たされる、溜つたもんでありません、何とか法律で制限出來ませんものですか』

通行人『ハ、小切手の濫用か、君も何だナ、現金でお願ひすると云へばいゝじあないか』

魚屋『それがなんすよ、奥樣なるべく現金でお願ひしますと云ふと奥樣、宅には現金は置いときませんと、ツンと濟ましてお仰るのでいつも澁々小切手で頂戴するですが此頃は店の方も忙しいのでいやもう絶對に賣らん事にしてます』

通行人『ハ、けど君、呼ばれたらそうもならんだらうッテ』

時は夕方、屋敷町なれば人の往來は尠い、重い荷を擔いだ魚屋と杖を曳く先生と謂はれる通行人とは話を杜絶えて又一二町を過ぎた

魚屋の步調は加つた、その時五六間後ろで『魚屋さん』と聲がした、四十前後の小柄な奥樣である

魚屋はそれでも聞えぬ氣に荷をギー〳〵謂はせ乍ら行く、奥樣は尙ほしきりに『魚屋さん』と呼ぶ

先生と謂はれる通行人はこれこれと氣が付いたが流石に氣の毒になつて、

通行人『君、呼でゐるよ後で』

魚屋（よくも振返らず）『奥樣お愛憎樣！魚はお仕舞……』

魚屋は通行人に小切手さん〳〵と小聲に云つて尙ほ足を速めた。

通行人はギー〳〵音を立てゝ弓のやうに撓ふ天秤棒に忍笑を禁じ得ず後から步いて行つた。

盤囊の中は確に未だ充分這入つて居る筈であるけれども、それは皆小切手ゆゑに賣棄ねる魚である

小切手もあまり小切つては融通手形の性質を失ふものと謂はねはならぬ。

二、股字引

未だ小學の頃、Kは前晩遲く迄女親に復習をさせられ、お了ひには片頰迄叩かれて暗記に努めたが肝腎の試驗の時間には頭が呆とする許りで薩張り問題は書けなんだ

時間は經つ、Kは唯鉛筆を嚙み紙をいぢるのであつたが、フト傾げて頰りに赤白い股の皮を伸ばしたり縮めたりしてゐる、Aは平常から惡戲千供であつたが、試驗最中に又なにをして居るのかとKは遠に不思議でならなかつた。

Kは先生の隙を見て頭を出して覗いた、Aは吃驚して袴を直し姿勢を正したが、先生は向ふを見てゐたので又袴を捲つた。Kは片方の足を椅子の横へ出し尙ほ頸を曲げてその袴のなかを見た、股の皮には墨で文字を書いたらしい、Aは試驗問題の解答をこゝに見出すべく皮を伸ばしたり縮めたり折柄から眞夏のこととて遠慮なく股から出る汗のためにじみ且つ消えんとする文字の跡を繼き合はしてゐたのである。

Kも兎に角Aの字引に依つて、シュウゼンと云ふ假名には修繕と書くのであることを知つた。

Kは次ぎの學期には股字引、腹字引、腕字引などいろんな字引を拵らへて見た。——きつと彼はその中見付けられて嚴罰を受けたかお了ひに泥棒になつて居やう、どうして裁判官などになつて居るものか。

京城雜筆

平壤漫筆

平壤東拓支店長　佐々木久松

△

牡丹臺を散歩して居る時には、しみ〴〵平壤に住む事の幸福を感ずるが、書肆に入つてその書棚を見る時にはつく〴〵平壤に住む者のみじめさを感ずる。

△

好い書籍を手に入れ難い土地に住むと、注意の眼は自づから自然の事物に注がれる樣になる。自分も平壤に來たお蔭で茄子の葉の出方や馬鈴薯を作るに適する土の性質やを知る事が出來た。

△

朝鮮には幽邃といふものがない、崇峻や廣漠やはあるが、幽邃といふものは殆ど求む可くもない。幽邃といふと親しむべき淋しさだ。內地の山道を歩るいて居つて、突然湖の如き靜寂を破つて啼く野鳩の聲を聽く樣な幽邃の氣持は朝鮮の何處へ行つても無い。

△

小川のせせらぎ程人の心を和ませる響はないだらう。その點に於ても朝鮮は惠まれぬ土地である。

△

謂ひ過ぎるといふことは事柄を下品にするものである涼しさのかたまりなれや夏の月

こんな句になると一向涼しい樣な氣持はせぬ。

△

書物でも、政治でも、活動寫眞の樣に『ヤマ』を作ることを念として居る樣だが、『ヤマ』の刺擊の連續によつて人類は仕舞にどんなものになつて仕舞ふだらう。

醫界小話

平田久雄

◎旭町の小林千壽先生、八月號の公論で、ウンと叩かれる。

◎一寸傲慢なやうには見へるが、つき合ふと、存外面白い先生である、一寸俠氣もあるしネ、何分受付とか、事務員とかいふ先生が、も少し氣をつけぬといかん。

◎耳鼻の阪井博士も、大繁昌で結構、むつかしい顔して居られるが、治療は徹低的、ナマぬるい事はしない、こゝはエライ處である。

◎會計の御老人が愉快な人だ、新聞や雜誌の批評は、一隻眼を具へて居る。

◎本町の一色先生、理財の方は本職以上との評がある、藏相とは氏の別名である。

◎碁もうまいが、株もうまいといふ人に、杉本（本町）先生がある。

◎新聞記者や、雜誌記者に評判のいゝのが、吉野町の木村先生、道理で慾のない顏をして居られる。

◎南米倉町の岩崎先生、圓滿な人だが、ひどい潔癖、御飯なざア出さぬ方がいゝ、先生頭をかいて尻こみせられる。

◎植村博士は、血の嫌ひな院長である、なるべく內輪に斬らうとし、瀨戸院長は『△△さん、思ひ切つてやらねば駄目ですよ』……どつでも宜しき方に。

◎明治町は、お醫者さんの巢窟、中島先生、衣笠先生、一番ケ瀨先生いづれも信用と德望がある、痔で有名な久枝先生、滿洲に行くとは、ほんとのことか。

【K】

京城雜筆

九州所々

總督府囑託　松田學鷗

◎博多で、第一壯快に感じたのは、東公園に在る日蓮上人の銅像だ、外敵來るも何かあらむと、萬里の風雲を睥睨する樣、人をして轉た崇仰の念を生ぜしむるものがある。

◎同じ公園の元冠紀念館、蒙古兵の捕獲品として陳列されてる中には、隨分朝鮮物がある。それも其の筈だ、文永の役とか、弘安の役とか云ふものは、今の朝鮮人の祖先等が、蒙古を煽動して日本を侵害したのである、それなのに何事ぞ、日本人も蒙古人のみが來た如うに思つて居り、朝鮮人も亦知らぬ顔で、豐太閤の征伐を怨んで居る、一體元冠と云ふ名が實に適はぬ、それよりか蒙古高麗聯合軍と公稱すべきだ、然しあの捕獲品を觀ると朝鮮人が散々に失し敗た事が明瞭に判るのである。

◎福岡の高校では、宮崎來城を聘して、漢詩の作法を講義させて居る。それも科外でなく本科に入れてある。それも福岡ばかりでなく九州到る處漢詩は盛んに行はれて居る。九州男兒の志氣今尙ほ堅實なるは、此等に由つても窺ふ事が出來る。

◎熊本は由來九州文敎の根源地であつた。秋山玉山、大塚退野、戇愚庵、高本紫溟、辛島驥井などの事蹟が大なる證據である。而して最後に明治大帝の師たりし元田東野の出でたることを忘れてはならぬ。

◎清正公の廟ある本妙寺の開祖日眞上人は、清正の帷幕に參し、征韓軍中に在つて、僧惟政即ち松雲と談判した程の猛者であつた。彼れは戰役後、九州の諸方に末寺を建てた、而してそれをすべて耶蘇敎の流行地に於てした。清正と日蓮宗、行長と耶蘇敎、それに日眞上人を對照すると、自然に宗祖日蓮の偉人たる事も聯想される。

◎高山彦九郎が肥後路より薩摩に入らんとした時に、苅萱關の監吏が誰何して境内に入るなと叱した。其の時、彦九は矢立より筆を出して、懷紙に墨黑々と

　薩摩人いかにやいかに苅萱の關
　もとささぬ御代と知らずや

の一首を書き、これを急使を以て鹿兒嶋城下の赤崎源助に示せと言つた、監吏は言はれる儘に源助に送つたが、翌日入境差支なしとの返答が來た。

◎赤崎源助、號は海門、今日尙ほ高等學校として依然たる、薩摩の藩學造士館の創立者である。然し鹿兒島の人は海門よりも山本秋水の方だと云つて居る。秋水は室鳩巢の學統の人だ。海門の名を薩摩人が稱揚せぬのは、谷山の鄕士より出身したのと、肥後の藪孤山に學を受けたからである。だが薩摩の人が如何に海門を稱揚せなくとも、其名は柴野栗山、尾藤二洲古賀精里父子、岡田寒泉、朝暮水等の如き當時の碩儒を始めとして九州到る處の學者は彼れを師と尊び友と愛した。彦九が彼れを賴つたのも偶然ではない。

◎鹿兒島照國神社の境内には、島津齊彬、同久光、同忠義三公の銅像が儼然として建つて居る、然し博多に於ける日蓮の如うに、海外萬里を睥睨せずに、只鄕封たりし薩隅日の海山のみを眺めて御坐る。矢張鎭國時代が忘られぬものと見ゆる。

◎鹿兒島は錦江灣に臨み、櫻島に對し、實に絢好なる風景の地である、然し何となく箱庭的で、英雄も出たが又歌人も出た感が首肯される。

◎或年の九月十三夜、落合東郭の鹿兒島に在るに寄せた予が作の後半に『十三夜月雁成陣。百二都城客說兵。想見琵琶歌曲裏。有人懷古不勝情』と云つたことがある。今度同地に宿したのは恰度古曆六月十三夜であつたが。到頭舊作の樣な對聞を獲ずに終まつた。

◎霧島山麓から都城あたりは住んで見たい樣な土地だ。實に蒼々莽々幾らも開拓すべき處がある。要するに宮崎縣の人口が尠ないのは交通が困難であつた爲である。今や日豐鐵道も開通した、移住の餘地が却つて皇祖發祥の蹟に在るのも尊い。

◎大分に夜十一時に著いた。直ぐ同地屈指の旅館に行つたが戸が堅く閉まつて返詞もせぬ、やむなく他の家に賴むやうにして宿した

聞けば大抵の旅客は此處に降りず　殿樣でなかつたら畫家として一層　死の年月日其他を彫刻する都合で

聞けば大抵の旅客は此處に降りずに別府溫泉に往き、用事があれば翌朝電車で來るのだから、自然大分には宿屋の要が無いとの事。

◎佐伯、鶴崎、杵築下車すれば幾多の史蹟もあり名勝もあるが、急く旅路は遺憾が多い。別府の一泊決して惡くはない。然し長く居るべき處とは思はれぬ。俗氣俗臭の紛々なる事甚しい。

◎日出は二萬五千石の舊城下だ藩主木下氏には賢君が多かつた、中にも俊長と云つた人は、雪を狩野常信に學び出藍の稱があつた、殿樣でなかつたら畫家として一層名が顯はれたであらう、林羅山の高第、人見鶴山を聘して儒學を振興した影響は多大のものであるが後ちに帆足萬里が出た爲に鶴山の名は忘却さるゝに至つたのは是れ亦遺憾と言はねばならぬ。但鶴山が日出侯と關係時代は軍もに竹洞の號を用ゐた、これ彼の地方の人々の大に注意すべき點である。

◎耶馬溪に行けよと勸めたゝもあつた、然し昔年已に一遊した事がある、二度と觀る程の處でもあるまい。

◎死の年月日其他を彫刻する都合である。

◎獨り小女のみならず、自分は勿論其眷族及子孫も均しく斯く風葬することを家憲とし、余等夫妻の鐫くべき塡所、風葬すべき位置彫刻すべき巖石迄も撰定してある强情我慢の我儘者、セメテ死骸だけ位は、親族知友の御厄介とならずに、自分自身處置し方が、何だか小薩張りと淸々する樣な氣もしますからな。

◎余の山林面積一千二百餘町歩の區域內には無慮一萬二千の鮮人墓地がある、而かも斯は全部余の所有權內にある、然るに權利者だからとて、この墓域に植栽でもしようものなら、大問題である、祖先崇拜の鮮人の事だ、其經營上の方便として、ソツトしてある、一ケ所十坪宛としても、十二萬坪である、坪一本を植栽して、三十年の後一本三圓とせば實に三十萬圓餘である、斯うなると所有權なるものも、絕對的のものではおまへんな、斯んな場合を思ふごとに盛に益々風葬の意義あるを痛感する、滿天下の御諸君方、大々的余の說に共鳴せられんことを祈る。

少女風葬の記

内田竹三郎

◎太古は知らず、余の寡聞なる現在若くは近世にて、死骨を風葬したのは、余が嚆矢ではないかと（余の知れる範圍）思ふ。

◎人類の繁殖際限なく、殊に我小日本區域內が驚くべき能率增進とあつて年々六十萬、約一割弱を生殖すると來ては、何十百年の後かは全く石塔で身動きも出來ぬ窮屈さに迫ひ詰められるかも知れぬ

◎先年女子の十五才なるが、肺患の爲に殪れた、家族五人の內、一番の年少者である、年の順序よりすれば、余が余の家ではイの一番に死ぬべき順序なるに、最年少者が眞先に死ぬてふことに、既に人生の矛盾があり、撞著がある、慾念の我思ふ儘ならざるを思へば生死須らく、どうなと勝手にしなされと大觀する外はない、なにも十五位で死ぬなら、大體生れて來ぬのが更に徹底せる筈ではないか

◎病中起たざるを知れる小女は死の四日前、兄に葬式の準備を賴めり、當日及び死の前日作れる歌

足腰の起たぬ病にいねふして苦み居れど時はたつなり

母上のみそばに近ふいねふせは嵐の夜も思ふことなし

◎屍體は仙魚山（慶尙南道金海郡）で火葬に付し翌年の一周忌日に、母の希望に任せて、庭前より見ゆる山上の巖頭に紛碎して散布した、是れが余の所謂風葬である。紀念として其附近に櫻樹百本を栽植した、爾來自分一家は勿論、里民の鮮人等迄『風葬山』と唱へる樣になつた、何れは其巖石に、生

◈茶を啜りて

石川利夫

この間李王世子殿下から下されたゴルフ優勝カヅブ、見事篠田次官の掌中に落つ▲次官の得意に引替へ、一同げんなりして『折角殿下から下されたのを、又王家へ御返盃したやうなものだ』▲山口銀行の田口さん、飯泉さんの漫畫を見て『ウン、似とるね、だが非常にふけとるね、飯泉君はマダ結婚前だのに……』大に御同情。

原稿難

篠田治策

松本社長貴下

京城雜筆の內容益々整ひ、材料愈々豐富なるにも拘らず、原稿の督促は中々急であります。私は、徒らに駄文を草して、江湖の嘲笑を招かんよりも、寧ろ信を貴社に失ふに如かずとも考へて見ました。更に又飜つて思へば炎熱灼くが如き時、屢々社員の來訪を受け、其儘に吾不關焉とするも、甚だ氣の毒に堪へぬのであります。是に於て、奮勇一番、鈍筆を呵して机に對するも、偖て如何なる題材を撰まんかに當惑しました。日頃文筆に從事せざる私達には、好個の題材を捕捉することが甚だ困難です。机に對して暫く苦悶を續けたるも、妙案更に浮まずして時は刻々に移るばかりでした。ふと八月號に、飯泉君のゴルフに關する名文あるを思ひ出し、其後のゴルフ競技にて、私が王世子殿下の優勝盃を得たる記事を書いて見ようかと考へまして太平記の句調にて、先づ飯泉君の總督カップ獲得戰に筆を起して見ました。

さる程に、常陸の國の住人飯泉幹太（ミキマス）は、既に總督カップの戰に優勝し、涙を流して喜びけるが、さて思ふよう、吾れ此の度の戰に敗れなば、命を限りに贏ち得たる曇の名譽も水泡に歸せんは兎も角も、若殿原が悪口雜言の程も思ひやられて、口惜しき限りにありなん。いでや再び群がり來る勁敵共を、一人も殘さず打ち破りて、天晴れ武勇の程を、後の世までも輝かさんと。第八番コースの小高き丘に立ち上り、稍々猫背には似たれども、クラブを握つて四方を睥睨したる武者振りは、勇ましかりける次第なり。

など書き行く程に、次第に本文の記事に到りて、盡く私自身の功名談と、敵手の失敗談をものせねばならぬようになりました。咄！、斯の如きはゴルフ道德に背き、亦男子の潔しとせざること丶思ひまして、既に數十行を書き終りたる原稿も、破棄して紙屑籠に投げ入れました。更に又夏の雜筆にふさわしき題材もかなと、思案の最中來客に妨げられて其儘となりました。

超へて翌日、仁川碇泊中の軍艦『磐手』の午餐會に招かれました。其日午前九時何分京城驛を出發しました、威風堂々たる海軍服の總督、溫厚にして君子然たる師團長、嘗て此車中にて天神髯を斫られたる時實知事、作業服の如きコートを著たる鐵道局長、其他誰れ彼の珍客、期せずして同車しました。此光景を視て、何等かの雜筆の題材を捕捉すべく試みましたが、之れ亦不成功に終りました。

仁川に到著後、總督別莊に少憩したる後、艦載水雷艇に便乘して、沖合遙かに碇泊せる軍艦『磐手』に行きました。海風徐ろに吹き來つて爽快謂はん方なく、前面『磐手』を望めば、日章の大軍艦旗は鮮かに風に飜り、威風四隣を壓するの觀ありて、一行は皆海軍氣分にならざるを得ぬ樣に感じました。

『磐手』は艦齡既に多く、亦昔日の戰闘力無きも、往時を追懷すれば感慨無量なるものがあります。即ち日露戰役の初めに敵艦隊を旅順港外に襲擊して機先を制し。爾來上村艦隊に屬して、浦鹽艦隊に對抗し、濃霧の中に屢々敵を逸して千恨の遺憾を止めしが。三十七年八月十四日、蔚山沖にて敵艦『ロシヤ』『グロンボイ』『リューリック』と會戰し、激戰數刻『リューリック』を擊沈し、他艦に大損害を與へて其死命を制した。此

時我も亦敵彈を蒙る事多く、戰死四十名、負傷卅七名を出した其後日本海海戰には、聯合艦隊に屬し、皇國の興敗を此一戰に決すべく、縱橫奮擊、敵彈を蒙ること實に廿七彈なりしも、僚艦と共に遂に克く敵の全艦隊を擊滅した。日獨戰爭の際は、青島沖の塔通島を砲擊し、更に南洋に策動して、敵船『コルモラン』の處分を了へた。近時亦屢々練習艦隊として、未來の幾多の東郷大將養成の任務に就いた現に今回も伏見宮博信王殿下外九十名の候補生を乘せて遠洋航海の首途にあるのであります。

午餐會の開かれた艦尾の食堂には、敵の彈痕を留めて、當年の激戰を忍ばしめて居ります。殊に此日總督の挨拶中に左の意味の一節があつた。

海軍に因緣の深き仁川に於て戰歷ある本艦に招待せられたるを感謝す。自分は日清戰爭開始前に、外務の加藤增雄氏陸軍の靑木宣純氏と共に政府の秘密命令を帶びて來り、仁川に上陸し、京城に往つたことがあつた。當時通信不便の爲め、政府は自分等を派遣し政府の決心を各々其系統の機關に傳達せしめたのであるが其任務を終りて後、軍艦浪速に便乘して歸途に就いたが、時宛も淸國軍艦『鎭遠』『定遠』が運送船を牙山に送りて後、仁川に廻航せるに出會した。當時兩國の形勢は次第に切迫せる際なれば、或は彼等は先づ我を砲擊するかも知れぬので『浪速』も亦斯る場合には直ちに應戰し得る樣に戰鬪準備をなして居つた。然し彼が若し發砲せざる時にも、彼には提督が坐乘せる故、我より先づ禮砲を發せねばならぬので、艦が近きし時禮砲を交換した。斯く平靜に過ぎて見れば、戰鬪準備として砲の側に多數の兵員が併列せるを彼に見らるるのも、面白くなく、其の事を東郷に（當時の艦長東郷元師）注意したら、東郷は全員に『伏へ』を命令したことがあつた。夫れより浪速は一旦佐世保に歸り、豐島沖の海戰に臨んだのであるが。往時を追懷して實に感慨無量である云々。

總督の演說中には幾多の懷古の情ある資料があつて、我海軍を今日の如く强大ならしめたる總督の帝國軍艦中にても最も戰歷ある『磐手』に於て、以上の話を聽き、私も亦一種の感に打たれました。

私は此仁川行も雜筆の一題材となる樣に考へまして、歸宅後筆を採らんとしましたが、雜用に妨げられ果さざる內に、夜行にて元山に來ることとなりました。元山にて小閑を得て此等資料によるか、或は元山の海水浴か、ゴルフ場のことなど何か書き列ねたく思ひましたが、元山に來て見れば、水泳とゴルフにて、身體綿の如く疲れて、筆を執る勇氣も出ず、滯在三四日にして再び夜行にて歸京することとなりました。

平素文筆に親む暇の無き私には、斯の如き原稿雜があります新聞雜誌に從事せらるる諸君ならば、以上の中何れかを捕へて必ず好個の題材とし、金玉の名文も書き得らるると信じますが私共には巧に題目を捕へて、一文を草することは中々難儀であります。何卒惡からず御諒察を願ひます（八月九日元山にて）

◈世間人間集

平田久雄

瀨戸病院長に原稿をたのむ『これは私の身代りですよ』と、東拓平壤支店長佐々木さんの稿が來る▲さては佐々木さん、あの手でやられたナと、記者一人でニコ〳〵笑ふ▲由來瀨戸さん、交友がひろい、地方の人が來ると大底あすこにとまる『退屈ならこれを讀みなさい』屹度雜筆が出る▲こゝまでは天下太平、處がどうかすると『讀んだら何か書きなさい』ペンと原稿紙が出る▲『先生どうします？……』『イヤ、わしが忙しいで身代りぢや』サッ〳〵と回診に行く▲戻つて來ると、『△△さんお暑う、時に脫稿しましたかナ』この一件、大手術以上に痛いとの噂である▲瀨戸病院で、瘤を落した田村さん『診察に行くとさア切りませう……院長はマルデ辻斬の名人ですね』

米國の苦悶

總督府醫院
醫學博士　伊藤正義

京城雜筆

○

大正十二年の夏からまる二年間私は米國ミネソタ州の小都、然しワシントンを小さくした樣な森の都、心地よいローチエスター市に留まつて醫者の勉强をしました、丁度その頃は米國議會に於ける排日法案通過の前後に當つて私共在米の日本人は此の法案の成行に關しては可なりに眞劍に且つ過敏であつた事を記憶します。

○

歸つてから既に一年越しになりますが、その間、矢張り日米の問題となると方面違ひの事ではあるけれども自然と注意を惹かれます昨日も總督府會議室でストックフホルムの世界平和促進協會大會へ日本代表として赴かるゝ津荷輔さんが『排日法に對する米國の苦悶』といふ題で一場の講話をされましたのにも暇を作つて拜聽に出かけました。初期日本移民の勞働法に對する無理解であつた事や向ふの風俗習慣に對して無理解、無頓著であつた事が今日排日の遠因をなしたといふ邊の一段は本當であるにしても餘り快い氣持で聞かれませんでしたが其の所說は全體として極めて公正で且つ兩國將來の關係に對して極めて建設的であつた事はとかく感情と偏見に傾いた議論の多い今日、特に氏の努力を多としたのであります。

○

勢に乘じ一時の憤怒に驅られてきのふまで手を取つた友邦に啖呵を切つておいて、個人間にしろ、國家間にしろ何時まで恬然と過す事が出來ませう、過ちを悔ひ衷情を披瀝して和解を求むるに非ざれば反對に復讐の强迫觀念に襲はれ惡鬼につかれたるものゝ如くます〳〵暴戾不遜の醜態を演ずるより外はありますまい、排日法通過後の米國民衆には此の二つの心理が複雜微妙に戰つて居ります、津荷さんが『米國の苦悶』といふたのは此の邊の消息をピッタリと攫んで居ると思ひます。

○

津荷さんが建設的な結論の要點とする所は此の米國朝野の士が冷靜にかへり道念に目覺めて排日法の罪過を悔悟せんとする態度の歷然たる今日に於て我等日本人は寛大なる紳士的態度を以て米國の此の尊貴なる心的過程を擁護達成せしむるやう共力せねばならぬといふにあつたと思ひます、此の態度は極めて大事な事と同感します。

○

歡樂極まつて哀傷生じ百紅散り失せて葉櫻の緘默と哀愁が來ます顧みると排日法の通過は熱狂せる米國民衆と政治家の極めて不眞面目な政治的惡戲であり國際的罪惡でありました、當時の新聞の口繪に地球儀を描き北米の領土上には無數の Sky sraner 聳立し物質文明の殷賑極度に達せるを示しその周邊より殊に加州沿岸より上陸して軍帽長劍を提げた黑鼠の大群が地球面を匐ふて大學攻めよせて來る繪でありました、その何を諷刺せんとしたものであるかは申すまでもありません實に馬鹿〳〵しい然し不快極まるものでありました。かくの如き低級な漫畫が第一面全部に說明入りで掲げられて居るのであります、そして單純な教育の乏しい民衆に恰かも曠野を渡る疾風のやうに傳播せられて所謂輿論なるものを生ずるのでありますからたまりません、省察の足らなかつたあの排日法案に對して心ある米國人士の胸に確かに云ひしれぬ苦悶が起つて來つゝあるのは寧ろ當然あります。

○

排日法案が去年の五月米國上院を通過した朝同地に一所に留學して居つたN君と共に何時もの樣に日本人增田君の經營するレストランドに朝食に參りましたが此の上院通過に互に顏を見合はして暫く無言をつゞけました、そして私共の前に擴げられたシカゴトリビューン紙の一面口繪を見つめました それは虎や獅子や犬や猿や象や河馬や一群の猛獸が一齊にあらゆる狂暴の姿態を演じて議政壇場にたけり狂ふの繪でありました、その前をフロックコートのミスタークーリッヂとミスターヒューズが憂に堪へない面持ちで同じくフロックコートの埴原大使を案內し來り『ヨク御覽下さい、あなたの御言葉一つで此の通りに亂れて仕舞ひました』といふと大使は『コレ日大使ウッド氏等が中心になつてゆがぬ』とはねつけてやつた、所

京城雜筆

ひました』といふと大使は『コレハ〳〵洵に以て』といふ表情よろしくの繪であつたのを記憶します

○

Grave Consequese（重大なる結果）なるあの一言が過敏なる猛獸の群れには恐喝の警鍾とひゞいたのであります、新聞には恐喝と威嚇を外交の具に利用したるは前世紀の舊式外交である、廿世紀の今日此の如き威嚇は世界の四等國と雖も忍ぶ所にあらずとあつた米國の壯漢代議士連はかくの如くして扼腕した揚句あの未曾有の國際的失敗を演じたのであります、一方にはまた口を極めて埴原大使の名文を禮讃せる日本晶貝の雜誌もあり又あの狂熱時に悍然として日本の正論に同情し加擔したLiterary Digort や New York Times や珍らしくも Chicago Yribuue などもあつた。

○

殊に日本に永住し日本及び日本人に理解を有ち日本に親し味を有つた米人達は排日問題の阻止運動の爲めに頻繁に紐育、ワシントンを往復した相である、そして愈よ通過した時の彼等の落膽は目もあてられなかつたと聞く。東京から歸米して居つたドタトルTからは當時私信の一節に、此の問題は確かに米國の Injustice（不正）である、どうしても早晩撤廢せしめねばならぬと書いてあり、また私の鄕里仙臺に傳道に從事する事三十餘年白髮となり病を得て歸米紐育郊外に靜養して居つた老嬢からは幾度となくセネートの無分別、不作法をかこち、お前達の前に近頃の自分の國をかべす〳〵も恥かしく思ふといふ意味を繰返してよこした。三四月前の手紙には前駐日大使ウッド氏等が中心になつて一九二七年七月一日を期して排日法撤廢の强硬なる運動に著手してるといふ小册子が屆いた。

○

米國美以教會大會にては若し日米戰爭起るも教會員は參戰せずといふ決議をした。新渡邊博士が過般ゼネバから歸朝せらるゝ前米國の舊友から是非久振りで米國に立寄らるゝ樣にとの案内に對し博士は『どうも米國の日本に對する態度仕打ちが氣に喰はぬから斷じてゆかぬ』とはねつけてやつた、所がその友人は長い一篇の詩を作つて米國の日本に對する慚悔と謝罪の眞情をよせた、新渡邊博士は之に感激し國際美談として國際聯盟本部に全詩を公開したといふ。

○

かくして米國人士の一部はよき惱みを惱みつゝある、けれども眞に此の惱みを惱み得るものは一億三千萬のうち僅に一千五百萬に過ぎざるを思ふて排日問題の解決もまた遼遠だと思ふ（七月十五日）

編輯室漫筆

石川利夫

○

伊藤正義博士に初めてお目にかゝた時は、一寸面喰ひました、といふのは、博士があまりお若いからであります。

マルで、書生ッぽうだ。

『米國の苦悶』は、博士の專門外の御記述ですが、人道的御考察——いかにも學者らしく、尊い隨筆だと感謝して居ます。

○

學士松田先生の『九州ところどころ』さすがに先生のお畑です、ほんとに興多く拜讀しました、家居が近いので、先生へはよくお邪魔します、そしてこつちがこの通りの一少年にも拘らず、先生はほんとによく指導して下さいます、學者といふものは難有いものだとつく〳〵さう思つて居ます。

○

廣田康博士の『京城漫筆』方々でいゝなアの賛辭を頂き、私まで大に面目を施して居ます、句のよしあしなど私には解りませんが博士の溫雅な御日常——私などはつく〳〵敬仰して居るのであります

○

それから總督醫院方面——醫專には、佐藤（剛藏）博士が居られます、博士は勿論、研究室や、教室にその日を送つて居られますが非常に苦勞人といつたタチの方で私共の仕事に十二分の御理解を有つて居られます、で、直接用事がなくとも、先生——といつて、お呼びかけする事が多く、スルト『あゝ、やつてますな、暑いのに御苦勞々々々、まア話して行き給へ』まさに一服の清凉劑です。

ひとり言

京城日報社　丸山幹治

一、出世の秘訣

戀愛神聖論者が必しも戀愛の勝利者でないとすれば、僕にも『出世』を說く資格はあらうと思ふ。凡そ出世をする秘訣は文章を稽古する工夫と同じだらうと思ふ。初めから、普通のものを書いては、文章は一向上達しない。普通とは下手乍ら意味は通ずる文章といふことである。その證據には新聞記者はいつ迄たつても文章が上手になれぬ。新聞記者中の文豪といはれる蘇峯、碌堂、鄕南諸氏のものにしても、鷗外、二葉亭、漱石等の文章に比べると、荒削りで、磨きが足りない、非常に見劣りする。それは初めから達意を旨として、技巧に凝らないからであらうが、一つは充分に絢爛の域を經ないで平淡の境に飛び越したからでなからうか。文藝家は新聞記者より文章に苦心することが多いが、それだけ未熟のうちはとても厭味が多くて見られぬ文章を書くものである。それと同じに出世をするには初めから小ましくれ、老成の風があつてはならぬ。自己批判、自己冷笑に陷つて、小さく固まつて了まつてはならぬ。人間的灰汁を拔いてはならぬ。女性的に自惚れを陰性化してはならぬ。寧ろ自惚れを陽性化し、積極化しなければならぬ。押といふ征服的意思を欠いではならぬ。厭味たつぷりの、缺點だらけの人間か一部には鼻摘みされ乍ら、グン〳〵出世し、友達仲間で一番評判のよくない男が、一番エラクなるものである。さうして出世をしてしまへば、不思議に灰汁が拔け、渾然たる老成の風が備はる。さういつたものを僕は可なり知つてゐる。草履取の藤吉が何で信長に認められたかを見よ、隨分、いやらしい阿諛便佞をやつてゐるではないか。それが嫌ひなら、一生處士橫議の太平樂を並べて爐つてゐるサ。尤も一段一段、平凡に順序を追つて出世をしたものは、さういふ過程が左程人の目につかないし初めから圓熟して出世した例も少くない。

二、人間禮讃

僕は人間がすきである。自然に親まないではないが、それよりも都會の大きな生活の流れ、物凄い人生の渦卷きを眺めることに一層の感興を覺ゆる。その癖僕は、一種の憎人主義ぢやないかと言はれる程、孤獨を樂むのである。散歩にもぶらりと一人で出掛ける、芝居へゆくにも連のない方が多い。しかし僕は別に變屈者とも思つてゐない。時には人戀しくなつて、友人を訪ねては、下駄に灸をすゑられる迄長座をする。實際僕の下駄には灸かすゑてある。何處ですゑられたか分らぬが、東京の人は長ッ尻の客にはそんな禁厭をするさうである。それに左程人を毛嫌ひしない。あんな奴、口もきゝたくないといふやうな食はず嫌ひは決してしないが、それでゐて『ひとり』になりたがる。遊びにゆく時、芝居を見る時、若くは何でも面白いものを見る時には、ひとりの方がよい。それは自由に亨樂したいためである。人と話しをしたりすることが、感興を殺ぐのである僕は何でも見たり聽いたりすることが、此上なく好きであるがひとのやうに見上手、聞上手にはなれぬ。どんな下手な藝でも相濟に面白いと感ずる。唯見てゐればよい。唯聞いてゐればよい。その間は、恍然として無我の境に入るのである。だから僕は、いつ迄も目や耳が肥えない

ことを望んでゐる。又望んでも到底駄目なことを知つてゐる。僕程に、藝事に好きであり乍ら不器用なものはあるまい。詩吟一つ僕にはできぬ。淨瑠璃や都々逸に至つては、聲で口にしたことがない。それだけどんな下手な藝でも僕には藝として受取れる。要するに僕は藝術の『民衆』であらう。否僕は、相應に目が肥えてゐると自惚れてゐる政治經濟の『見物』に於ても、矢張り『民衆』たるを免かれないかも知れぬ。

三、僕の癖

僕の癖は、行儀の悪いといふことの總てであるが、自分乍ら可笑しいのは室内散歩である。まるで檻の中の動物宜しく室内を歩ゐく。編輯局にゐても、時々やつてゐる。別に何を考へるでもないが、歩るきたくなるから歩るくといふ外はない。たしかボスウエルの書いたジョンソン傳だと記憶するが、ジョンソンは往來を歩く時に必ずポストの頭を撫でる。時として撫で忘れたことに氣がついて、態々跡戻りをして撫でたといふが、僕にはそんな天才的奇癖はないけれど、凡人的な悪癖はまだある前にいつたやうに室内を歩き乍ら、机上の新聞か何かの端をちぎつて口に入れる。そのまゝ吐き出すこともあり、ムシャ〳〵いつ迄も嚙むこともある。誠にきたない話で申譯もないが、某社に居た頃、誰かに此の癖を發見され、そんなことはないと一應抗辯して見たが、證據物件として提出された綴込の新聞が、一枚殘らず片隅がさかれてゐたには甲を脱いだ。ところがその後、室扶斯をやつてからは嚴に羊の眞似を戒めてゐるが、それでも發作的に新聞紙片を口の前まで持つてゆくことがある。それから獨語をいふ。これも直さう〳〵と思つてゐるが、却々直らない。流石に人の居る時はやらぬが、室内運動の最中には、うつかりするとやる。一番いふのは『今日は十五日』といふのだ。考へて見ても、十五日といふ日に別に嬉しいことがあつた覺えもないし、去り迚ひどい目に逢つたといふ記憶もない。何から斯んなことをいふ癖がついたものか靈張り判らぬ。その他我儘な癖や無精の癖、早飯の癖など癖以上は慥にあるが、斯んなことを披露に及ぶのも、一つの悪癖だらう。

◈隨感隨想記

平田久雄

青木專賣、全北の知事となる▲この人、どこか天命に安んじ、人間よりも、天然を相手とする風があつた▲僕は、あすこをうれしく思つた▲俠斜の方面でも閣下といはずして、先生といはれた、人間學の先生だらう▲何處へ行つても、ヤキモキする男でないこと請合▲矢鍋さん、殖銀に入る、前の深尾さんもいゝ人だつたが、この人も圓滿で、さわりのいゝ人との評がある▲お酒が好物で、梯子は得意といはれる、重役室が陽氣になつてよからう▲水口さん、國境からもどつて來る、所謂だんまり屋だが、仲々親切な人である、腹は强いところがある。青木さん立派な後任を得た▲亥角さんの東津水利組合長、これは適任である、あゝ見へて、仲々小手の利く先生、民間に立つても、立派にやつて行くだらう▲新黄海道知事今村さん、値臺の大地主でたま〳〵歸省すると、三太夫執事、家僕、村民黒山の如く村境に迎え『若旦那樣にはようこそ……』といふ調子ださうな▲道理で殿樣式一本氣な處がある

◈ポプラの窓

石川利夫

深尾前殖銀理事の招待宴で、松寺法務局長の謝辭にいはく『深尾君このたびショクサンギンコウからショクサンキンコウ（稷山金鑛）にかはる、一口に言へば、同じ語音である、しかし銀から金にかはるのだから、むしろお目出度いと申さねばならぬ將來ともどうぞ宜しく……』實にお手に入つたものだ▲あとで渡邊獨眼氏の曰く『銀は二十五錢、金は六圓……』

―初對面の―
尾崎さん
A B C

東拓の尾崎さんにお目にかゝる、而かも初對面である。

尾崎さんと言へば、うつくしい歌を詠む人である、炎々たる情火を歌ふ人である。そこで僕は、尾崎さんと言へば、貴公子風な人か、或は情熱そのものゝやうな壯剛な體格を有つ人か、どつちだらうと、實はお目にかゝるまで、小さい疑問を有つて居た。

さて、初めて會つた尾崎さんは、貴公子風（所謂やさ男）でもなく、それかと言つて、骨張つた人でもなく、恰かもその二つを調和したやうなどこか壯美といつた感じのする人である。

ちつとも氣取屋でない。

ちつともエラさうな處がない誰をでも、先づ兄弟分として少しも警戒しないで、話すといふ處がある。

僕の觀察では、ふところは大きいと思つた。

この無警戒で、テンから氣を許して、初對面の人に會ふといふことは、仲々出來ないこと（あの地位では）である。

端的にいふと、僕は逢つてよかつたと思つた。

一人の知己を得た樣に思つた

× × ×

心持のいゝ人である。

いつまでも若さと、純情を失はぬやうな處がある。

それが俳氣といふなら、いふ者既にダイブ化石してると思ふどうも日本人は、硬化し易くていかん。

枯れ過ぎて、あぶらが切れる尾崎さん鎌倉の、

四十にして悶えの人となりぬ
吾れ五十は近しなほ悶え居る
嵯峨お室加茂へ廻りて東山青
葉の中の京といふ街
春雪や俥を下りて入入りぬ扇
ケ谷の仇めける門

などは大にいゝ。

仔細らしい軍役面の人に、どうしてこの人間味――青春味滿々の歌がよめよう。

× × ×

會見たつた五分間、匆々にしてお暇乞ひする。

しかし、いつかゆつくり氏の人生觀や、戀愛觀や、讀書觀を十二分に拜聽したいと思ふ。

一箇の人として、十分なつかしい人である。

× × ×

伊豫の人と聽く。

私は、二十年前しば〳〵通り過ぎた三津や、高濱や、宇和島や〳〵さうした處の南國的風光を思ひうかべつゝ、いつか楷下に降り立つた〳〵。

この日、二宮さんは、見えて居ない、書道の名家志村さんも何處へかいらしたといふ……。

―或る日の―
勸業信託

金芙蓉

勸業信託の藤尾さん、ニコニコとして語られる。

長い間小鳥を樂んで居るが、この道樂だけはやめられません。誰れだつて、朝のしづかな寢床のなかで、ほがらかな鳥の囀りを聽くと、いゝ氣持がするでせう。がそれだけでは、十分といへません、進んでこれをはぐくみ、そだて、その愛にひたつてこそ、人著一如の涅槃境が體驗されます私の宅などでは、子供にまでやらせて居ますが、それは幼年期にある破壞性とか、殘忍性とかを、十分緩和する力があり、且つ子供の情操を養ふに、最もいゝかと思ひます。

聞けば、どんな多忙な時でも、小鳥の世話だけは、自らせられそれさへ時間がないなどいふのは、それは餘りにせゝつこましい人間のいふことだ……。

× × ×

藤尾さんの小鳥の話には、なか〳〵哲學味が多い。――一度そこへ平井さんが、忙しさうに出勤される。すると待ち設けたやうに、いろ〳〵の人が寄つて來る。平井さん家客にかこまれつゝ、八面應酬、盛んに論談じて居られる。――これが或る日の勸業信託の一光景。

——應接室の——

住井さん

雲萬里

三井物産に住井さんをお訪ねする。

楷下の應接室で、小一時間もお話する。

住井さん、質素な事務服をつけ、うち寛いで話されるので、大に氣持がいゝ。

私は、香港に十年近くゐたが、あすこは昔から蠻夷に近いといふ避地で、あまりいゝ物（書畫）はない處です。それより最近北京に行きましたが、あすこには大に感服しました。

さう言つて、北京ばなしとなる。

北京には、有名な瑠璃廠といふ街がある、第一流の書畫商、陶器商、什器商、骨董商の軒を列ねた處で、先づ世界的美術市場とでもいひませうか、とてもタイしたものですよ、私は知人から勸告され、いきなり瑠璃廠に行つては面白くない、先づ支那藝術の豫備知識をたくわえるといふ考へで、例の文華殿、武營殿の御物を見て、それから瑠璃廠へ行くがいゝといふのでその通り歩いて見ましたが、イヤ支那は流石に六千年の舊邦、大國……その一々の品種に、東洋文化の深さ、重さ、端嚴さ、莊重さ、そして濃い匂の漂つて居るには、今更乍ら感嘆之を久しうしたわけです。

老年に及んで、時と餘裕があつたら、何は措いても、あすこに行き、心ゆく東洋美術の大殿堂に、浸つて見たいと思ひます。

日本の製作品でも、マダ德川末期までは、どこかいゝ處があつた——と言ふのは、當時の作家は、學者であるか、達人であるか、悟道者であるか、兎に角人間として腹が出來てるので、作品にどつしりとした莊重さと氣韻が見られる、近ごろのものは、よく買はされますが、どうも困りますね……。

× × ×

住井さんのお話では、この頃少しづゝ、眼があいて來るやうに思ひます、が、我々東洋人は兎も角も支那を見、そこで一通りの洗禮をうけ、それからそろ〳〵歩くがいゝと思ひます、日本物だけの世界で呼吸するのはあぶない……。

× × ×

所藏品ですか、ろくなものはありません、けれど、一度は見て戴きたい。

× × ×

話はキビ〳〵して居る、キチンと筋が通つて居る、そして悠揚迫らず、三分ぐらゐ横身になつて、時々眼をふせて談られる、瀟洒な人である。

おいくつ位だらうかと思ひつゝ、再訪を約してお別れする。

——新聞界の——

元老諸君

K C K

◎

菊池長風氏には、金と時を與へて、朝鮮近世史を書かせたいものだ。

◎

大垣金陵氏には、座談でいゝ『朝鮮昔ばなし』といふ奴をさせたい。

◎

共に鮮語のわかる人、鮮人と交游し、しかも近世政局に親しく出沒した人——。

◎

朝鮮史と、朝鮮文學紹介に於ける青柳氏の功勞は、蔽ふこと出來ない。

◎

今秋釋尾氏の『併合十五年史』が出來る、著者は性格鮮明にして、一流の是々非々を公言する人——私史として、必ず異彩を放つだらう。

◎

支那人の詩に『新人如花雖可寵、故人似玉由來重、花性飄揚不自持、玉心皎潔終不移、故人昔新今尚故、還見新人有故時：：』とある、僕等は、古い人を尊敬する、古い人の長處を認めたい。

京城雜筆

獨逸人

京城電氣　見目德太

夫れは二週間ばかり前の或る朝の事です、內地へ行かれる方の見送りに驛へ參りますと、偶然にも以前東京で知合ひになつた獨逸人とホームで遇つたのです、獨逸人其名をハーン君と云つて東京の或商館に本國から派遣されて居るのですが、今度妻君を貰ひに本國へ歸つて來て今回西比利亞を通つて再び東京へ行く途中で、つまり新婚旅行中と云ふわけです、獨逸の女味を豐かに持つた可愛らしい其新妻に紹介され、汽車の出る間、五六分ばかり話をしましたが、次に書いてある事は此夫婦の話を基調として夫れに私の見聞を加へたものです。

皆樣先刻御承知の通り歐州の大戰では獨逸は想像外に酷い目に遇つた結果となつて居ります、鐵と石炭の寶庫であるアルサス、ローレンは佛蘭西に取られ、ポーレンは獨立し剩へ莫大の賠償を負はされて居ますが、國內はさして秩序も亂れず、國民は自暴自棄にも陷らずに孜々として產業に勵んで居ります、實際歐洲の何れの邦よりも獨逸の工場は活氣を呈して居るのです、京城などで後れ馳せに此頃八時間勞働などと云つて居る中に獨逸の勞働者は國を救ふ爲めに九時間も十時間も……然も京城の電車乘務員の半にも達しない僅かの給料で喜んで働いて居ります、低級の生活に！、粗食に甘んじて！。

實際獨逸人はかねてから餘り食物などに贅澤いたしません、斯ふ云ふ事があります、たしか今から三年前、例の有名な相對性原理のアインシュタイン先生が東京へ來られた事があります、獨逸人の歡迎會か……先生は云ふまでも無く獨太系の獨逸人ですが……麴町の倶樂部でありまして私も出席しました、が遠來の珍客を遇すべき晩餐の食卓は僅かに野菜と肉のごた煮のやうなもの一皿とパン一切れ丈けです、いくら何でも是では質素を通かに通り越して居ると流石に私も驚きました、然も會場は和氣藹々として、それこそ掛直なしの歡を盡した會合と見受けました

獨逸の經濟狀態は既に安定して居ります、一圓で何十萬馬克などと云つたのは數年前の夢で今日は例のレンテン馬克が通用して居ります、是は國民の持つて居る不動產まで擔保にして出して居る馬克であつて、國民擧つて挽回に熱して居る其意氣は誠に壯とすべく、又一面悲慘ではありませんか。

平和條約の結果賠償の代りに聯合國に遣る船と、自分の使ふ船を最も安く造る手段として、造船所や船舶會社の委員が五ヶ年もかゝつて船舶用品の規格統一の大事業を完成し、今日ではどんな小さいどんな複雜な部分品でも圖面の必要は無く單に一枚の『商船規格書』と番號でどこでも出來るやうな仕組になつて居つて、非常に安く非常に簡單に出來るわけですが、今日までに斯くして出來た船は數百萬噸にも達して居るそうです。

這般の大洪水の慘禍に遇つた京龍の市民も獨逸人の熱烈なる此意氣を以てせば復舊はもちろんの事自然の此脅威も變じて我等の味方と爲し得る時期の當然來るべきを疑はぬ。

と云つて必ずしも獨逸禮讚ではありません。或る意味に於て共に復興に直面して居る彼と我、彼より學ばざるべからざる事の多きを獨り高調するに過ぎないのです。

【一六】

◇雲のゆらぎ

吉田莊一

久原鑛業の小龍さん、暫らく執筆をやめて居られたか、來月からは折々獨特の隨筆を頂けることになつた▲といふのは、最近久原では各方面で仕事を始めたので、小龍さん南船北馬、殆んど京城に居られなかつたのである▲小龍さん位愉快な人はない▲一寸話して居ると、詩、句、歌がマルデ口を吐いて出る▲しかもそれが皆んな即席即興である▲それに意價は、日本的大家、畫書共に一家の風格をそなへ、氣韻甚だ高秀だ▲小龍さんに會ふと、僕はいつも洋服を著た晩唐の詩人に遇つた氣がする。

九時間も十時間も……然も京城の　平和條約の結果賠償の代りに聯　晩唐の詩人に遇つた氣がする。

京城雜筆

御前會議

漢城銀行秘書役　李淵雨

朝鮮では今より約三百年前までは今日吾等の起居する溫突と云ふものがなかつたと云ふことであります、其の代り寒いときは土間に若干の火氣を入れ防寒するのみにて別に薪炭の必要がなく、材木の需用も殆んどなかつたのである。

山には森林が自然繁茂するみにて人工を加へなくても森林は益々鬱蒼となり、到る處密林を見るに至つた、森林が各地に繁茂せるを以て群獸の棲息に利便なる故、虎又は熊の如き猛獸が非常に繁殖し、人畜の被害夥しく交通上不安に付き一般人民は是を憂慮し、其退治方を時の王様に獻議したれば、王様も是れに御心痛ならせられ、或る日閣臣を召集し、猛獸の驅逐方を御下問になると、閣臣等鳩首凝議の結果山に繁殖せる森林を皆伐採せば猛獸は棲息し能はざるにより自然自滅すべしとの妙案を得た、王様は此妙案に非常に賛成せられ、直ちに全鮮に森林伐採方を命令せられた、處が伐採したる森林の處分に又一段の苦心をなし、種々研究の結果今のやうな溫突を造り是を焚けば一擧兩得であるといふことになつた、そこで之を實行すべく一般に奬勵し、一方に於ては森林をどし〳〵伐り倒し、一方を於ては溫突に薪を焚き、それでも餘るものは地上にて燒き拂ひ、其の殘りが即ち木炭となるに至つた。

要するに當時は王様も消極的政策を執られ、一般の思想も消極的世渡りをなしたるものと思はれる、爾來益々溫突の發達を見るに至れるも、制限ある森林は益々缺乏を告げ、薪炭の供給に奔走するの已むなき至つたと云ふ今日の全鮮に於ける禿山は即ちこの御蔭でないかと思ひます。

◈足許から鳥

石川利夫

漢銀秘書役の李さんは、私達の仕事に最もふかい同情と理解を有つてる人であります▲『いつか私も何か書いて、お助けしませうね』斯ういはれたのは、今年の櫻もモウほろ〳〵散るころだつたかと思ひます▲處が、八月の中頃になつて、急に李さんの原稿が欲しくなり『どうでも今日中に執筆して下さい』といふと、この藪から棒の注文に『それは困つたナー』と頭をかゝれましたが、一寸考へて『よろしい、あなたも暑いところを御出で下すつたんだから、では二時間あとでモ一度御足勞下さい……』斯うして、たつた二時間の間に、しかも訪客頻至の間に、出來上つたのがこの『御前會議』であります、こゝで一寸お禮申して置きます。

◈聞くがまゝ

平田久雄

熊平商店は、京城隨一の金庫店だが、その本店が廣島にある關係だらう、店の人は皆んな廣島縣人だ▲そして新に人を求める時も『なるべく廣島縣人を……』と特に注文してるのは、おもしろい▲それから店の人には、株を與へるやうにして居るから、社員即ち株主で利害はしつくり一致して居る▲モ一ッ、感心するのは、店の人が皆んな讀書力をもち、何んでもひろく讀んで居ることである▲これは支店長がさういふタチの人だから自然そんなことになつたかと思ふ▲他の店には、一寸例のないことである。

財界ひとり言

京城日日新聞社　別府八百吉

朝鮮は積極的に

財政方針は消極かよいか積極かよいか、這回の政變も表面此見解の相違から起たと見てもよいやうだ、內地の如き財界ではムロン濱口藏相の消極方針が適當であらう消極方針で整理の遂行を期して徐々に立直らすのが本筋に相違ない然し乍ら朝鮮の如き幼稚な土地の產業發展を期せんとするのに、一にも二にも消極方針で臨むのが是か非かは、三歲の兒童でもその判別に苦しまぬであらう、若し內閣が內地消極、朝鮮積極を認めてくれれば、邦家のため朝鮮のために頗る慶幸だが、消極的財政方針を政府が確守するとなれば朝鮮のみの例外を望む譯に參らぬであらうそこに朝鮮在住者の惱みがある、一部の人々は此の見地から政府財政方針の積極轉換を要望してゐるが、現內閣では容認されさうにもない、朝鮮ではなすべき事業がドッサリある政府が何かその新らしい仕事をしやうとするには先立つものは金だ、增稅至難の朝鮮としてその金を得るの途は借錢の外はない、然るに政府の非募債方針といふ關所が中々此の借金を通して呉れぬ、そこに當局としても心勞がある、唯政治的や又不生產的の借款は認めんでもよろしい、が產業開發を主眼とする鐵道の延長とか、土地改良とか、水利事業等の生產資金の借款は相當程度にイヤ相當程度以上に特例を設けて認めてもらいたい、此點に於て在鮮官民の有力者は一致の上中央當局にぶつつからねばならぬ、蓋し生產資金ならば投ずれば投ずるだけ、夫れ相當の收穫は上つて來る、鐵砲玉のやうに行つた限りに歸らぬ金とは譯が違ふ、序でに政府が這回鮮臺兩銀行の整理に與へた特典は隨分勇斷である、預金部や日銀の鮮銀融資利下げは思ひ切つたものだ、あれは政府として從來の行きかかり騎虎の勢ひ止むを得ざるものもあるだらう、鮮銀整理の遂行は朝鮮のために直間接に恩惠になる譯で、誠に結構な話しだが、夫れは夫れとし、今少し殖銀にお貸し下さる低資の額を增し利子を下げて續々とお出し下さる譯には行かないものか、成程朝鮮は日本の全部でない、又預金部の資金も自ら限度があらう、その資金の根幹たる郵便貯金力は恥しい程朝鮮は少ない、そしてその郵貯以上に朝鮮への低資は出てゐる、內地各府縣の要望も中々政治關係が手傳つて多いに相違ない、夫等は一々御尤もであるが非募債主義で朝鮮の產業資金のふり向けを制限するといふ方針ならば……いくら運動や要望をしても十二分に制限されるだらう……此の方面の低資融通にでも開放的な閉鎖的でない方針を執つてほしいのである。

【一八】

更生の朝鮮銀行

朝鮮銀行のやかましい整理も八月二十七日の株主總會でその減資無配を承認し、玆に確立する事となつた、鮮銀の大穴埋立ては減資無配を大手術とし、單なる無配を中手術とし、減配を小手術と見てよかつたやうだ、株主の利害關係夫れに對外信用の懸念そんな事から新に立てらるべき整理案は小手術かよく行つて中手術だらうと記者は考へてゐたが、發表されて見ると減資無配の大手術決行とある玆に至らしめた大藏大臣の英斷は流石に稱揚の價値があり、その整理に當らんとする鈴木新總裁の勇氣も亦お世辭ならずほめてよいと思ふ、今後の鮮銀は內地の普通銀行業務を消極化して、主に海外爲替業務を扱ひ、主力を鮮滿に集中するらしく朝鮮銀行本來の使命に歸る譯である、その整理の完了に何年を要するかは疑問乍ら、豫定の進行をして約十年といふ以上、鈴木新總裁の在世中に整理完了の祝盃を擧げ得るかは疑問とせねばなるまい、新整理案は政府並に日銀の鮮銀融資利下げが一大特典で西原借款の利拂は政府で肩代りするといふから鮮銀の經理上その荷は餘程輕くなるであらう、唯鮮銀今日の窮狀呈露には事實上政府も一半の責任あり、此の位の負擔は當然の事だらう、又局に當つた理

京城雜筆

事者は新舊共に一掃の形であり、その罪を責めても始まらない、氣の毒なのは株主だが、御用船鮮銀丸に便乘して遭難したとあきらめる外ないだらう、その株主の損失は小さくないにせよ、命までとられはすまいからココハ整理完了を樂みにあきらむる事だ、そこで新なる朝鮮銀行は資本金四千萬圓で拂込二千五百萬圓と細り、積立金後期繰越金皆無となるし、大穴は殘るといふ勘定で、新設銀行よりも內容はわるいが、然し乍ら從來賣つてゐるノレンと得意先はさう〳〵馬鹿にしたものでなく、何といふても鮮滿金融界の覇者で、腐つても鯛と評して差支へない、それに發券銀行といふ特別のウマ味をもつてゐる、之等を差引くと新設銀行よりも面白味はあると見てよからう、新總裁以下の重役は恐らく更生の鮮銀の意氣で經營を進めて行く事と信ずる、大手術後の豫後の經過は氣遣ひ無用だといふ調子で、大陸日本に於ける金融大動脈の活動を冀望する。

京城米穀取引所

非常の事變が起ると、京城に於ける食糧在庫の貧弱さがすぐ暴露するのは情けない事である、七月の大水害で京城は交通上無援孤立となつた、當時市中の在米は一萬石內外と計算され、一日七百石を潰すとし、十五日は持つまいと云はれた、先年の關東震災の慘狀の續現された時、總督府は救援米の調達五千石かを京城の有力米商に相談したが、テンデ問題にならなかつた、京城は三十萬の人口を包容してゐるが、米の見地から云ふと生產地に遠ざかり消費地である倉庫設備が欠げてゐる、移出港でもない從つて當用日の正米が產地から每日流れ込んでその消費に充用さるゝにすぎぬ、思惑米とか假需要に應ずる米とかゞ極めて少ない、これ米の京城の貧弱な原因だ然し現狀の推移では京城としては誠に心細い、どんな天災が湧き起り、七月の水難以上の災變なしとは何人も斷言し得ないであらう、茲に於てかいかにして米を京城に集積するか、その方法を考へねばなるまい、夫れには倉庫の新設とか、金融上の便宜とかも必要だが夫等はそも〳〵末だ、根本としては京城米穀取引所を新設し、若くば一部の提唱にかゝる仁川取引所を京城に移轉し、定期米の大量取引によつて米の假需要を生ぜしめる事が緊喫の問題であらう、或は米穀市場があるからといふ論者もゐるやうだが、米穀市場の實力と其利用されつゝある程度の貧弱さは數年の經驗が餘りに明白に之れを語り、かゝる主張は一顧の價値もない、米穀取引所は消費地よりも集散地にといふ議論もあるが、消費地の京城に米取を新設する事によつて、京城は集散地となり得るであらう、人口三十萬を有する半島政經の中心地たる京城に米穀取引所新設の必要な事は諄々しく云ふまでもない、吾々はその新設若くば仁取移轉要望の聲のうすいのを不思議視してゐる、必らずしも米を京城に集むるためのみでない、京城米穀取引所の新設必要理由は多すぎて困る程だ、當局並に先覺者の一考を求めたい。

信託會社の盛衰

大正十年の株式熱勃興は必然の勢ひとして京城に於ける株式會社の濫設を促したが、當年から十一年に亘り、特に目立つて出來た會社は信託會社であつた、これは當時に於ける株式投機の熾盛、信託の資本金のまとまりて多かつた事盛義の著しかつた事、財界の注目をあつめた事等により何人の記憶にも殘つてゐやうが、大正十四年財界のドン底を漸く突いて立直らんとする今日夫等の信託會社は、

京城證券信託　解散
同　現株信託　解散
同　商事信託　解散
朝鮮勸業信託　再減資
京城穀物信託　存續

勸信は一千萬圓の巨資を擁し、證券と現信は五百萬圓宛であり、穀信は百萬圓、商信は五十萬圓乃ち總資本金は二千百五十萬圓であつたが、今日の殘存は勸信の三百萬圓と穀信の百萬圓と都合四百萬圓にすぎぬ事となつた、商事信託は現信に合併して遂に瓦解の運命に會つたが、三大信託の解散減資のあわたゞしかつたのは株式熱の冷却と株價の崩落のためといふて差支へなく、證券投機熱狂の大反動の波に打ち崩されたものであるが唯不振を喞ちつゝも穀信の存續せるは他の大信託が巨資を擁し、その營業を株式の賣買金融とせしに反し、穀信が比較的資本を少なくし穀類を業務の主體とし、倉庫金融を地道にやつたからである、財界の好況時代がいつ來るか歷史は繰返し大正十年の二三割位の株式景氣はいつか出ぬ事もあるまいが證券信託の濫設と擴張には人氣も罰ふまいし、銀行も警戒を通り越して、嚴戒の眼を以て見やうから證券信託會社の黃金時代は到底茲三年や五年の內には來るまい、とすれば望む所は殘存信託會社の堅實な行き方である。

林間生活

金剛山にて　西崎鶴太郎

毎年想ふて果さなかつた林間生活を、今年はやつとの事で實行する機會を得た。それも七月の大洪水に妨げられて、二ヶ月の豫定は一ヶ月となり、しかも元山から溫井里に廻つて家族一同と轎で來るといふ厄介さ加減である。

來て見るとバンガロー生活もなか〳〵面白い、來る途中が厄介なだけ、それ丈け都塵を遠く離れた氣がする。四圍の環境は幽邃閑雅で、優に積日の俗腸を一洗するに足りる。

長安寺ホテルのバンガローは、極めて簡素な建物ではあるが、五葉の松と樅の密林の中に、自然石を其儘基礎に應用してゐる所など頗る雅致に富んで居る。家の周圍の窓前には千古の苔蒸したる大石があり、その傍には萩や女郎花がそよ吹く風に搖られてゐる。どんな日中でも窓から陽のさし込む心配はなく、瀨の音と蟬の聲と草叢にすだく虫とは、冷え〴〵とした山氣と共に窓から流れ込んで、夜などは寒さを感ずる位である。

◎

さて此處の日常生活であるが、朝起きると其のまゝ裏の溪川に下りて、清冽な流で顏を洗ひ、少し寒むいのを我慢して素裸となつて身體を拭く、そしてすぐ川邊からそゝり立つて居る翠巒に對して深呼吸をする。清々しい山の氣が五臟六腑に泌み込んで、身體全體の細胞が一種形容すべからざる爽快さを感ずる。川上の方を見ると、密林の上に金剛山の特色を有する崇嚴なる釋迦峰が雲烟の間に隱見して聳えて居る。川から歸つてすぐ朝飯であるが、そのうまい事はお話にならぬ。

晝は釣りをやる、球を撞く、碁を打つ。家族の者は石を拾つて來てはいろ〳〵なものを机の上に陳列する。或は近い山から百合や兎蹄を伐つて來て挿すなど、十日や二十日を暮らすのは夢の間である。

山の案內者や附近の鮮人なども一日〳〵と親意になつて、野菜だとか鷄肉鷄卵などを買つて來て呉れる。飲料や罐詰類は携帶品以外にホテルからも供給して呉れる。それに思ひがけない物賣りが通りかゝつて、食糧品は不自由なく集まる。妻や娘がいそ〳〵と夕餉の仕度をして、今日釣つた川魚が食卓に上つた時、これは誰れが釣つたとか、あの石の陰でこれを釣り上げた刹那は、何とも言へぬ氣がしたなどと、手柄話や失敗談に一しきり賑ふ。

夜の十時には紅茶を入れて、又一同が食堂に集まるが、午後三時の茶の時間には川や山に遊び耽つてなか〳〵人數が揃はぬ、往々にして忘れがちである。

◎

今年は水害の爲め遊覽者の少いのは遺憾であるが、夫れでも外人は三々五々隊をなして、パンと繃詰位を携へ、お寺泊りで山から山へと探勝して居る、彼等は頗る輕裝で婦人でも男子の樣な服裝で、背中に雜囊を負ふて川抔平氣で渉る所は、一寸大和撫子では眞似の出來ぬ藝當である。

此ホテルにも只一人の英人客が居る、此人は七月の初めから九月の末迄此處で暮らすそうだが、われ等はそんなに長くは迚も事情が許さぬが、この分だと一ヶ月や二ヶ月位は、少しも退屈せずに過す事が出來るだらうと思ふ。殊に蚊は居らず、蠅も殆んど居ないと云つてよい位だから、無精者の午睡には頗る好境である。夫れに朝夕山登りや川渡りで可成り運動するからウント大食するやうになる。弱虫は身心の鍛錬に出懸けて來るも一策であらう。

◎

林間生活は案外多忙で、歌も句も頓と出來ぬが、例によつて腰折れ二三を錄して置く。

山は皆霧立ち昇りところ〴〵
きやかに見ゆ明日は晴れかも
たま〳〵の此林間の生活に妻はいそしみ夕餉とゝのふ
川の瀨にまぢりて聞ゆ蟬の聲岸のしけみは眞ひる靜かに
山里はいよゝなつかし鶯の何思ひけむ窓に入り來ぬ
岩谷の瀨々を上りて深るみに出でにし魚はゆたに泳げり
句一つ
霧の山夏の雲日もすがら

生ける屍といふもの

石森久彌

宣傳用にして居る自分の長唄が蓄音機から放送にまで延長されて多くの人々を惱ませうとは思はなかつた。

一ヶ月ばかり前の話である。日蓄の大須賀君から煽動されたもんだ。

『蓄音機に入れなさいよ、あなたなんか入れなくちゃいけませんぜ』

とさんらんと光る金歯の口でさらでだに向上發展して居る余の長唄を寵招してくれる。煽てられた余は始めは眞面目な顏をして聽取し、次には天下をとつたやうな豪快な哄笑を敢てしたものだ。カンラ〳〵と傍若無人な笑である。自分乍ら馬鹿〳〵しい得意だが、こんな事で冷靜になれぬ處に人間の弱味もあれば、滋味もあるもんだと思はれた。

五月雨のけむる或日貫金町の日蓄の吹込室に行つた。十二時頃芳本の女將百太先生に電話すると彼女もさるものである。

『わたしの絃で間に合ひませうか』

と來たものだ、三省しで見るとふざけた言葉だが、これがうれしいのだから致方ない。

『まあやつて下さいッ』

と大きく出たものだ。百太は三味線箱を持つて俥でやつて來た。

こう改まると、緊張せざるを得ぬ。始めて演壇に上る前の氣持である。咽喉がコクリ〳〵鳴つて、滿腹さへ痛い。

考へて見ると、一體自分の唄を誰れが期待し、誰れがこのレコードを聞くのか見當も付かず單に緊張し、咽喉をコクリ〳〵やるその心理狀態が既に研究資料である。

四隣密閉、鬱氣充滿、唄はざるに既に流汗淋漓、それに三味線彈は余の右の肩の邊に一段高く座して耳の側で余の耳、裂けよと彈く名人たる余の唄が悲鳴となるのも無理はない。

とに角蓄音機に入れた譯である

吹込曲目は松の綠。一ヶ月半たつてレコードが出來て來た。それが自分の手に屆いた。二階の座敷で始めて自分の聲を聽くのであるそれは丁度鏡の前で自分の顏を見るよりも寫眞にした顏を見る事に興味を持つと同樣である。しかも花嫁が見合の時、おむこさんと交換する寫眞をヂーツと眺める心境である。

靜かにレコードは廻りはじめた百太の三味線は鮮かに鳴り響いた而して余の聲は淒絕を極めた節調を以て現はれて來た。丁度それを聽くの心境は、石森久彌が幾千の民衆の前で演說をやり、彌次り倒されて悲慘な生ける屍といふものをさらし、又石森久彌が其聽衆の一人彌次の一人としてまのあたりこれを見てゐるやうな夢幻的場面である。余の心臟は高鳴りするを覺え、余の著衣は冷汗が徹した。そして慚愧と、陳謝と、悔ひ改めといふ初めの期待とは正反對の現象を顯現した。殊にア行がわあつと强く聽える。それが丁度月形半平太に三尺の秋水で橫腹をえぐられたやうな一種獨得の聲になつて現はれて來る。

何時か三越の蓄音機係の番頭さんが余を見付けて、

『蓄音機に入れられたそうですね、是非一枚廣告用に頂戴し度いもので』

といはれた時余は

『上げませう』

とアッサリと頤をしやくつたものだがこの生ける屍の前に直面した時、將來一生こんな大それた謀叛心は起さぬと決心した。

けれども諸君これで若し人ありあなたの蓄音機吹き込みは大へんいゝですねといはれれば、未だにそれは當然ですよと答へるに相違ない。

◈訪問覺え帳

石川利夫

京電常務の中屋さん、非常な讀書家として有名、重役室に行つて見ると、なるほど新刊書雜誌類がウント積んである『まア仕事のアイ間に樂みに讀む位、併し忙しいので……』本を伏せて氣輕く話される▲運動も碁も熱心、旅行もお好きだとのこと『碁はいかゞです』『イヤ、あの方はトント雜兵で……』と謙遜される▲しかし中屋さんの碁、筋はよほどいゝさうだ。

——社長室の——
河内山さん

白玉山

前財務局長といふので、どうもムツカシ屋だらうといふ氣がする。

その一方には、エラさうな顔した、無愛嬌千萬な人ぢやないかといふ氣もする。

尤も、いつか西崎氏が、

『ヌー棒だがね、しかし人間は出來てるよ、一度會つとくといゝ』

と話して居たので、少し安心する。

今一ツ、ちよい〳〵隨筆を頂くが、どこか洒脫な處があり、禪味的な處があり、それからいたづらッ兒のやうな處もある、それで、もう一安心する。

× × ×

お部屋に通ると、

『サア、おかけ下さい』

男らしい眉が、印象的だ、體格も頗るいゝ、ぽつり〳〵話されるが、決して無愛想ではない——さう〳〵、こゝで西崎氏が親切な男だよといつた一句を思ひ出した、社交上手でないかも知らんが、つき合つて行くと、だん〳〵味が出るだらうナ。

× × ×

會社の話や、印刷會社のことや、碁の話が出る——。

すべてが結局のしめくゝりの處だけ話すといふ樣な處があるグッと無駄を端折つて、要點だけ押へて行く——しつかりして居るナと思ふ。

× × ×

凡そ京城の重役級で、この人くらゐ重役臭味の少ない人はなからう。

篠田さんを思ひ出した——この二人は、昔の書生そのまゝ、自然と人間が出來て行つた人、そこに重役的枝巧がちつともない、クサミがない、全姿態がそのまゝ實質である。使はれる人にとつては、これ位安心なおやぢはあるまい——そんなことまで假想する。

× × ×

お暇乞をする。

『どうぞ亦たお出で下さい』

この一句が、形式的でなく、いかにも眞率味を有つて響く。人なつこい響をつたへる。

——一味涼風だ——。

もどつて來ても、胸がすいてるやうだ。

——飛入兩雄——
碁戰記

一兵卒

◎德野さんの書いた有賀西崎兩雄碁戰傍觀記——近ごろの讀物である。

◎僕も二三度兩雄の戰ひを、陪觀したことがある。

◎なる程、うつのは早い——けれど、要處は考へるね、五分十分、二十分——あすこに實力が貯へられてあるんだね。

◎有賀さんが名手をうつと、西崎さん『フーム、智者だからナ』と敬をほめる。

◎西崎さんが妙手をうつと、有賀さん『フーム、强いからナ』と獨語的贊詞を呈する。

◎局面むつかしくなると、西さん目鏡をはづして、靜にふきそしてぢーッと全局を點檢する……。

◎有賀さんむつかしくなると洋服の膝を、正しく坐り直し、盤に對して、ちょつと橫身となり、沈々默々、策戰これ務める

◎西崎さんは、古への橫綱相撲の如し、正面から四つに組み相互の實力を、一氣に較せんとす、實力主義——。

◎有賀さんは、名譽の劍士の如し、青眼にかまへ、出足早くする〳〵と道場正面に馳突して行く。

◎どつちも正々堂々だ、但し相撲と劍道との差がそこにある

◈三戸萬象君

石川利夫

今年の鮮展に落賞した三戸萬象君、依然として半鳥隨一の畸匠だ……▲どこか悟つた風な處がある▲それで、今年は何でも彼でも支那に行き、大に畫腸を養つて來るといふ▲そこだ〳〵。

―涼風一夕―

本町小話

行路樹

◎本町一流の呉服商の人達は昨年打そろッて、金剛山見物にと出で立つた、丁度その晩が滿月の夜だつたので、どうだこの會を滿月會と名づけ、時々一處に旅行しやうぢやないか――といふ相談が成立つた、で、今年はどこに行かう、慶州がよからうといふ事になり、近く滿月の夜を卜して、賑々しく出發する筈、そこで、一寸申しそへて置くが、この滿月會といふのは、單に天上の月のみならず會員中にもおツムがテラ〳〵する人が相應にある、そこでこの意味をも含んで居るのだとは、ナールほど意味深長。

◎江戸川主人の城壽さん、相當藏幅も多く、書畫に對しては一見識有つてる人である、この頃も例の新築の二階に、大々的横額が要るといふので、萬象畫伯に揮毫方をたのむ、そこで、酒好きの三戸君すつかり酒杯をしりぞけ、大勉强でタテ五尺、横三間といふ大額面を、汗だく〳〵で描き上げて居る、その一ッが山金剛、他の一ッが海金剛――蓋し畫伯得意の詩境である

◎三中井呉服店主人の中江さんは、謠曲は堂に入つて居る、それから書畫もわかる、一寸めづらしい人物だが、商賈の方にかけては仲々贈ッ玉がふとい、この間も北支からかけて、南支一帶の各都城を視察して來たが何んでもこれから支那一圓に手をのばす計畫らしい、これほどの雄圖を抱いて居る人は、先づ京城にはなからうナ。

◎本町二丁目の川井（浦島屋）さん、若いうつくしい人だが町内の世話は仲々よくする、それに本を讀んで、何んでも知つてるには感心する、いづれ近い中に、メキ〳〵頭を出して來る人だらう。

◎巴城館主の松本さん、義太から活動に岸を變へ、今では中央館主、色男だけに氣が多い。

豐年の話

石川利夫

不二興業の楷上で、藤井社長にお目にかゝる、とても暑うございますなといふと、この暑いのがいゝんですよ、まア辛棒して下さい……▲そして『朝鮮では大洪水のあとは、きつと大豐年といふことになつてる……』とて、これまでの實例やら經驗やら話して聞かされる▲人は水利の大立者、談は滔々として盡きない、辭し歸る時は一寸こつちも一廉の農學者となつた氣持。

―俎上の人―

松原さん

浩々吟

◎八月號の或雜誌に、鮮銀松原さんの人物評が出て居る。

◎僕は今それを瞥見して、獨りでにや〳〵笑つて居る處です

◎人間でも商品でも、どうもピカ〳〵物に限りますね、少し燻んだものになると、もう御客樣にはわからない。

◎灰色、鼠色――こんな言葉で、片づけられてしまう。

◎世の中といふやつ、實に馬鹿々々しい。

◎支那の古い繪を見ると、厚つぼつたい感じがする、どこか重厚とか、渾厚とかいふ感觸がする、見て行くほどよくなる、いつまで經つても飽きが來ないけれど、見た眼に、あッといふやうなことはない、そこになると新畫だ、このごろの日本畫だ

◎いや、非常にわき道にそれたが、松原さんのやうな人は、支那畫を見る用意で、まア半年もよくつき合つて見るんだナ。

◎究極の人物評は、人としてどれだけ出來て居るか――だらうぢやないか。

◎露骨にいふと、あの人は、もう悟道しとるぜ――ちやんと悟つて居るぜ、何も彼も知つて一つも知らん顏してるぜ。

◎ゆうぜん模樣を、通りすがりに批評するやうに、さうお手輕くは行きますまい。

京城雜筆

無題

東拓　尾崎敬義

一中の小春髪結みたれ髪洎ぐましき秋の明かな
色街の午前は淋し朝風呂を急いで戻る拔小路かな
蛾の飛びて灯にさはぐかな我が庵は靜かに更けて微苦笑の秋
歸れと云ひかへるなといひさまゞ〳〵の人の心の文は來りぬ（近事）
はかなきは夕顔の花八月の夕べの闇に色は匂へど
かくて人も死ぬべきものを夕蟬の聲をかぎりになく音こそあはれ
夏草や夜露にぬれし水蒸氣散ずとみれば太陽の出づ

雜詠

貫鐵洞　笠原要太郎

川端のいしの上にてたゝきつゝころもをあらふ賤の女のむれ
唐うたに見し砧をば目のあたりあきは夜ごとに聞くぞ淋しき
冠もうはぎも脫ぎてあとに手をくみてたゝかふ人の氣長し
春の花秋の紅葉のながめなしやまは小さきまつばかりにて
上したのけぢめきびしき習にてきこりも髯をたくはふるとは
鵲が墓と知るよしもなし盛土のうへには草のしげるのみにて
日暮らしの賤の伏家も垣たてゝとなる人にはこゝろゆるさじ

までドス黑く、おまけに一錢銅貨

京城雜筆

途上偶感

日本商業通信　西本量一

までドス黑く、おまけに一錢銅貨大のヤイトの跡歷々たるまで見せられては堪つたものでなし。碌でもない御面相に網を張らせらるゝに至つては、百尺竿頭更に一歩を進めたものと謂つべく、げに女ほど圖々しきものはあらじと、つくづく思はるゝのである。

流行唄

街の灯が流れるその端れ、そこに人の圓陣を作つた眞中に、ヴイオリンに合せて唄ふ二つの影。其の唄の上手で珍らしいよりも、好いた同士が斯ふして樂器一つを小腕に、都會から都會をさすらふ身の上は、羨ましいと言へよう。

それは兎に角、斯ふした流行唄が、時の流れと共に遷り變るは是非もない。言論の自由の全く奪はれてゐた明治初年には、自由民權思想の皷吹は專ら、當時讀賣と言はれた此の流行唄に唄ひこまれたものである。從つて唄ひ手も壯士風の荒くれ男で、唄もダイナマイト節なんといふ物騷なものであつた。それが降つて日露戰後『あゝ夢の世や〳〵』が出てから大分歇化し、『あゝ分らない〳〵』で厭世的になり、最近『ストットン節』で遂に亡國的となつて來た。

新聞のアラ

新聞の誤植、誤譯ほど、目ざはりなるはなし、此の意味に於て新聞社たるものは高級の校正係をおいて然るべしだが、地方の新聞になると、そこまでは中々手が屆かぬと見へて、中には隨分ひどいのを臆面もなく讀者の前にブツつけるのがある。ル・マタン市、酒井小仙も笑はせるが、桑港布哇間無著陸飛行などは一寸した不注意。最近某紙は英國首相ボールドウイン氏が兩肩に椅子を擔いで運んでゐる寫眞を掲げて、さて其の註に曰く『流石は勞働黨の首領だけあつて云々』と。流石記者の博識振りを發揮して餘蘊なし。

學校で智識を得る以外に、新聞紙から受ける智識の最も莫大なものである。此の意味に於て餘りに誤字、誤植、誤譯の多い新聞を家庭に入れることは考へものだと思ふ。

乞食の智慧

乞食とて、より多く貰はんが爲めにはあれで中々に腦漿を絞ると見える。南大門通りなどにウヨ〳〵と道行く人をなやまして居た彼等の群が、水害と聞いて逸早く二村洞あたりへ驅著けて、避難民に成りすましたと聞いては、彼等の慧敏に茫然たらざるを得ぬ。

著物など內地人に成りすましていたいけない赤兒を懷き、同胞變の發露を狙つてゐる鮮人乞食がある。うまい所に眼をつけたものだ同じ他國に住む此の憐れな同胞の姿を見ては、十錢二十錢は多しとせぬ。一時彼の日收は五圓を下るまいと、腰辨共をして羨望の眼をみはらしめたものだ。

コナンドイルの小說に斯んなのがある、倫敦有數の金滿家が名流から夫人を迎え、倫敦郊外宏莊なる邸宅に住んだ。所が或日夫人は倫敦テームス河畔の阿片窟の二階の窓からたしかに夫の姿を見た。そこで有名なシヤロック、ホームズの探偵によつて、その男が乞食であることが分つたといふのである、知らず、彼鮮人はいづこに宏莊なる邸宅を有するや。

婦人の洋裝

近頃目立つて殖えたるは、婦人の洋裝である。女學生の洋裝は申分なし、唯既婚婦人衆の洋裝に至りては一考を煩はしたき點多々あり。胴よりも太く、且つ短かき脚を、內股にてチョコ〳〵と、うつ向き勝ちにて歩ませ給ふは、寧ろ第三者をして赤面せしめる。西洋並に肩から胸のあたりをあらはに現はすはよしとして、其の色あく

◈煙を吹いて

平田久雄

平壤の前商議會頭福島氏、何をやつて居るのか、モウ一ヶ月の餘も朝鮮ホテルに滯在▲往年の政敵內田とか古莊とかいふ連中が來るまア來給へといふ調子で、盛におごつて居る▲風采も堂々だが贈ッ玉もふとい▲先生何をするつもりか知か……。

東京雜記

苑南洞寓居にて　前田昇

○

書畫骨董界は何と云つても未だ災前の狀況には復せぬやうである これは震災の關係許りではない、一般財界不況の影響と見るが至當だ、美術倶樂部も兩國時代の全盛に引き替へ今は芝に貧弱ながら開場して居る、それでも流石は東京で賣立てに一點『萬』の聲は決して珍しとしない、南山町の賣立てとは桁が違ふ。

某所に開かれた即賣會を見た、一般に安物で高價な物は無かつた最高文晁の千二百圓から二三十圓所までであつた、此會で感じたことは鑑賞が益々實質本位になつて來たことである、決して名では値が定まらぬ、名の小い物でも出來や保存や寸法等實質の良い物は必ずや値が高い、これは確に鑑賞の向上を物語るものと思つた。

刀劍界また御多分に漏れず不振の狀にある、併し此方は書畫や骨董と少しく趣を異にするのは眞の愛刀家以外即ち刀劍を骨董扱ひにする通中は好景氣時代でも比較的少い結果寧ろ景氣の影響は少いとも云へるが、一方書畫骨董の如く一部室内裝飾の爲め云はゞ實用的要素極めて少い刀劍の需要は昨今の場合愈々少い道理で結局品物が動かないとは其道の者の談である現に當時某華族から太刀十數振の賣物があつたが好景氣時代少くも千五百圓乃至二千圓平均であつたものが現在七百圓平均と云ふ始末で、賣主も躊躇して居た、太刀は高價なものではあるが眞の愛刀家は強て欲しがらない、寧ろ骨董家や素人向と云ふべきものである爲め、今日の場合一層向け口が乏しいのではないかと思はれた。

○

東京の物騷な事はお話にならぬ郊外など勿論だが、日本橋區の某町に白晝追剝が出る騷ぎ、毎日新聞で是等の記事を讀む毎に僕は考へた、是等犯罪の狀況は頗る大膽の如くであるが恐らく素人であると思ふ、何故ならば白晝往來の僅かな絶へ間を見て敢行する如きは一歩誤れば忽ち食ひ込むので而も目的物が何等特種のものでない以上、其收穫と危險の度とは相償はないものとなる、郊外等の持兇器强盜も二三人組で無暗に兇器を使用する點から考へ何れも玄人の遺口でない、或は勞働に堪へない智識階級の離職より來る生活苦に因する犯罪にあらざるか、是が僕の素人考へであつた。

○

新聞などで常に叱られてゐる官僚氣分と云ふものは今や官僚から大銀行とか特種會社とか云ふ財閥に移らとする樣な感じがする、これは僕の一部の體驗である、偶々一部そう云ふ人に出會つたのかも知れないが夫なら幸ひである、併し物質萬能殊に黄金萬能の現代に於て財力中心に實權が動くと云ふ事が或は自然であるまいか、德川の幕末に貧乏旗本が藏前の札差しの前に何等の權威が無かつた事は明かな過去の事實である、將來財閥式など云ふ新熟語の出來ない事を望む。

○

東京の空氣大きく言へば思想とでも云ふか、夫は正に荒んで居る享樂氣分とか刹那氣分とでも言ふやうな底力のない上つ調子な樣子は隨所に窺はれる、一方には不景氣だ無職者をどうすると騷いで居るが、大凡そ盛り場と云ふ盛り場は隨所押すな〳〵の盛況である、夜の銀ブラから彼の邊りのカッフェーの情緒は凡てを遺憾なく物語つて居る、震災直後絹布を著て歩いて水をブッ懸けられた其當時の事を考へて今を見る時に如何にも東京人士の熱し易く醒め易い粘り氣の乏しい氣分がまざ〳〵と見られるのである。

併し晝間あの凡ての活動に疲れ切つてトタン家根の下に一方口の窮屈な所に寢る……而も動ともすれば生活難に迫はれると來ては刹那氣分にもならふ、享樂氣分も起らふ、極端に言へば明日の事は考へて居ない、全く其日〳〵に逐はれて居る、そこに何等の餘裕も無い、寳ひがない、自分は自分だけ思ふ所に向ふのみだ、他人など顧みる暇はない、是等の結果はやがて冷酷になる、冷酷を通り過せば險惡にもなる、果ては眼付まで變つて來る、アー厭だ〳〵僕はつく〳〵東京の生活がいやになつた、付まで變る虞はないやうだ、併し東京の人から僕等を見たら定めしりと味噌汁の身を失敬して居るのである、

の場合愈々少い道理で結局品物が動かないとは其道の者の談である

新聞などで常に叱られてゐる官僚氣分と云ふものは今や官僚か

京城雜筆

つて來る、アー厭だ〳〵僕はつく〳〵東京の生活がいやになつた、自分の故郷でありながらどうも歸る氣がしない、それを思へば朝鮮は有り難い、京城に居てもまだ眼付まで變る虞はないやうだ、併し東京の人から僕等を見たら定めし鈍重に見へるだらふ、其眼には如何にも活氣が乏しからふ、夫は丁度吾等が彼等を險惡に見る樣に。

青虫

殖産銀行　金谷要作

◎花ばかりではつまらない、菜つ葉でも少しお蒔きなさいな。と妻がいふ。

◎名にし負ふ京城の借家ずまひそれに安家賃ときてるから、庭といつても軒先四尺幅程に短冊苗代の樣な空地がしめて五坪程あるばかり。そんないささかな土地の利用にまで實用向のものをと希ふ我が妻の心根も、纖弱な二兒に病みぬかれて物質的にもかなり苦惱したことからかと思へば、吾ながら誠に心哀れである。

◎諾し來たと、ある日曜の漫ろ歩きの歸るさ、南大門の路傍で、夢ばかりなる野菜の種子に覺束ない日本語の名札を添へて、つく念として徒に行人の去來を眺めて居る貧しげな鮮人の種賣り親爺から白菜と蕃茄の種子一握り、それに玉蜀黍の種子十粒程買つて來た。

◎白菜の若葉は朝餉の味噌汁のさいの身として妻に獻ぜんため、玉蜀黍は別に子供のものとして、蕃茄の紅實は僕の麥酒の肴にせんがためである。

◎野菊、ふぞ菊、百合、朝顔には片隅に深慮を願つて、一坪程は白菜に二坪程は蕃茄に割愛して、十粒ばかりの玉蜀黍はばら〳〵と塀ぎはに蒔いた。

◎世のおぼえ目出度い片假名綴りの花とは違つて、日が照り露を置き雨さへ落つれば、賤が伏屋の空地にでも歡んで育つて呉れる白菜、蕃茄、玉蜀黍の心は吾等には限りなく好ましい。

◎やがてうひ〳〵しい子葉から尤もらしい親葉を一雨毎にすいすいと擴げて行く頃となつたら、紋黄、紋白いくつもの蝶々が天空から舞ひ下りて來て、白菜の若葉にそつと吻接けしてはしきりと我が庭前で胡蝶の亂舞を觀せて呉れる

◎味噌汁のさいの身にもなり、又胡蝶の舞を演じさせて子供等を樂します、實用にして且娯樂といふ虫のよい現代人の欲求を滿たして呉れる、是れ白菜大明神なる哉としたゝか喜んで居たものである

◎蝶々にばかり見惚れて菜つ葉はつい等閑にして居た處が、これはしたり、菜つ葉一面に無數の青虫……吾等よりは一足先にごりごりと味噌汁の身を失敬して居るのである、

◎餘り悦に入つて居ると、兎角足もとから虫が湧く。誠に癪なことである。が、まゝよ一椀の味噌汁は犧牲にしても、このせち辛い人の世に、數十の蝶々を放つてやらう。

◎青虫よ、安んじて我が家にて蛹となれ（一四、七、一〇）

◈卓上小話錄

平田久雄

例の大洪水の當時です、京城辯護士界にさる者ありと知られた松本切山、赤尾――それにお年寄の水野老まで交つて、大邱まで行つてゐたと思し召せ▲そこへ京城大洪水、列車不通と來たので、洗石のえら者連もスツカリ青くなる▲やつとのことで水原まで歸つたが、開通にはマダ二三日かゝるといふので、旅館に泊り込む▲碁をうつても、酒を飲んでも一向退屈の虫は退散せぬ、そこで運座とあつて一同がテンデに唸つた句といふのがドの如し。

川止めに講談もする狀師かな

書生節明日も歌はむ籠の鳥

碁にも飽き歌にもあきて晝寢哉

空模樣ながめて思ふ坊やかな

川止めに若年寄の艶話

松本正寛氏の事務所で働いて居られる山中辯護士、恐らく年齡から言つたら最年少の一人だらうが、仲々の論客だ▲それに肌合の頗る面白い人で、文學、藝術――そんな方面にふかい理解がある▲記者も二度面會したが、例の代言屋臭味がちつともない、…判官の曰く『見てゐて御覽なさい　あれは今に大物になりますよ』

敬慕の人々

―書道の恩師―

東拓　志村四方一

【二八】

が、先生の遺作を通じて今も其の德を慕つてゐます。

中村春堂先生

中村さんは鷺堂門下の高足で、一斯華流系統の第一人者であることは、世間周知のことであります。私が中村さんを知つたのは、鷺堂先生の門に入つてから間もない頃でありましたが、先生は當時、日本女子大學の教授で、既に一家をなし、盛名を天下に馳せてゐました。從つて、同門の間にも大先輩として常に敬意を拂はれてゐました。崇高な人格の所有者で、あまり口數をきかない人でしたから、私は、ひそかに其の風格には傾倒してゐましたが、一度も教へを受けたことはありませんでした。

私が、中村さんを先生と呼ぶやうになつたのは、大正九年九月、北海道の旅から歸つて、暫らく冷めてゐた書道熱が再び燃え出し、先生を牛込の寒香書院に訪ねた時からであります。その時から習作の批評を願ふやうになり、また當時、先生を中心に十數名の選ばれたる門下の者と、一二門外の緣古者とで麗澤會なるものを組織してゐましたが、この會は全く自由な研究團體でありまして、よく出席する顔振れは、相澤春洋、依田鵬坪、高塚竹堂、大崎鷺亭、飯塚春翠、松本芳翠などの展覽會や各種の書道雜誌で名をなしてゐる人々と、七八名の婦人連で相當突込んだ議論も出ましたが、何れかと言へば上品な面白い會でありました。私もこの會に出席するやうになつてから、先生の所藏品にも目を晒すやうになり、高等な藝術にも接し、自分の作品をも聊かながら藝術的に取扱ふやうになりました。

小野鷺堂先生

時は、明治四十一年二月の或る晝下り、雪を含んだ空はいやに曇つて肌を刺すやうな風の寒い日でありました。私は、獨りで何か考へながら、また何物かを求めるやうに、とぼ〳〵と神田の街を歩き廻つてゐました。

それは或る事件から、自分の惡筆をつく〴〵歎いた揚句、本氣で手習をして見ようといふ志を起し誰れか師事する人を探しに出掛けたのであります。探しにと言へば可笑しくも聞えませうが、全く探すと言ふより外に言ひやうがないのです。その頃、神田には、玉木愛石、小山雲潭といつたやうな書家が數名門戸を張り、各々、多數の門下を擁してゐましたから、私は、夫れ等の書家を一々訪問して其の門標の文字を見ては、彼是れと師匠の人選をしたのです。僭越と言へば僭越、無禮と言へばこの上もない無禮ですが、私の心持は成る可く自己の己性に適した書風の大家に師事したいといふ、極めて眞面目な心願から、こういふ努力もしたほどに斯道に對する私の智識は幼稚だつたのです。

その日の黄昏時分、私は、猿樂町の小野鷺堂先生の玄關に立つてゐました。言ふまでもなく『小野鋼之助』と書かれた寫經風を加味した癖のない書風に魅ぜられてゐたのであります。

當時、私は、まだ中學生で、汚い袴に破れた帽子の學生でありました。先生に面會すると、すぐ、習字をしたいといふ理由を長々と述べ立て、さて是非入門したいと申込むと、先生は最初私の風采に驚き聊か迷惑さうな樣子でしたが其の熱心さに動かされてが、『兎に角勉強して御覽なさい』と入門を許された時は、もうすぐにも一廉の書家にでもなれるやうな氣がしました。

先生は學習院女學部の教授でありました爲めでもありませうか、門下には女流が多く、而かも、假名を學んでゐる者が多數でありました。それで私も主として假名を稽古することになり、それから約二年間といふものは、可成の熱心さを以て稽古に勵んだものです。一方斯華會にも入會して、友人も出來るやうになり、追々、趣味も出て來るにつれ、遂に止められない道樂の一つとなり、今日、多少でも書を樂むやうになり得たのは全く、鷺堂先生の賜であります。

先生は、先年物故せられ、最早其の溫容に接することは出來ないその後、大日本書道會へも先生の推薦で入會し、多くの書家とも

とが度々でありました。

私が初めてこの人を知り、其の他の諸氏で、何れも書道研究家として相當の識見を持ち、今年の

京城雜筆

その後、大日本書道會へも先生の推薦で入會し、多くの書家とも交際するやうになりましたのは、全く、先生の指導と親切であると感謝してゐます。

羽田春埜先生

未だ若い人です。恐らく私と同年輩位でありませう。名を求めない人ですから、世間的にはあまり顯れてゐませんが、書道上に於ける造詣の深いこと丶、識見の高いことは、實に驚くばかりであります。先生は、國學院大學の出身で卒業論文には、日本書道史の研究を掘出し、その卓見に審査員をして舌を卷かせたといふことであります。先年聚古假名帖を著して一部の識者間には、其の非凡なる技量を認められるやうになりましたが、實際、其の技量と見識は將に當代第一と申したいほどであります。またこの人は、容易なことでは自分の作品を人に分ちませんが後進者の指導の爲めには自己秘藏の法帖を無造作に開放して毫も惜しむ色がありません。これはこの人の藝術的良心の然らしむるところで、世の所謂書家者流とは全く其の選を異にし、この邊に最もよく先生の人格が表はれ、敬慕の念に堪えないのであります。また面白いことには、先生は書以外の問題に就ては一切口を開かないといふ主義でありますが、談一度書道上のことに及べは、滔々數萬言、夜を徹してでも話し通すといふ風で、私などもよく日曜の午前から始つて午後になり夜に入り遂に再び午前になつて、省線電車がなくなつたのに驚いて、目白の上り屋敷から、とぼ〳〵と犬に吠えられながら京橋の木挽町まで歸つたことが度々でありました。

私が初めてこの人を知り、其の教へを受けたのは、大正十年の秋小鳥甫君の紹介で、山手町にはよく見る垣の外まで咲き亂れたコスモスの可憐な姿に詩情をそゝりつゝ薄の穗さへ風になびいてゐる武藏野鐵道の踏切を通りぬけ、婦人の友社を目當てに、遙々、目白の幽居未來庵を訪ねた時からでありました。

私は、その時目作の短册一枚を持つて行きましたが、散々に缺所を擧げられて、有益な教へを受けまた先生を取り卷く數氏の作品をも見せて貰ひ、且つ種々の古筆本を取り出しては説明を加へられたので、初めて古筆に目さめて、爾來、平安朝期の古筆類に沒頭するやうになつたのであります。

先生のお宅では、毎週一回先生を中心として、作品の批評と研究をする、未來庵小集といふものが開かれます。集る者は、武岡樂水外島里有、飯島總業、早川友異其の他の諸氏で、何れも書道研究家として相當の識見を持ち、今年の美術協會の展覽會にも入賞してゐる位の人々であるから、なか〳〵面白い意見も出て、議論に花を咲かせて、思はず時を更かすのですが何れも眞劍な態度で、而かも集る者の總てが所謂專門的の職業書家でなく、書を藝術として樂む者のみであり、全く世流に超然として、自己の信ずる道を開拓してゐるので、洵に氣持ちのいゝ集りであります。

私は、渡鮮以來自分の不勉強から、この集りとは全く疎遠になり日に〳〵筆硯の荒敗して行くのを悲しまずには居られません。

今春上野の竹の臺で開かれた日本美術協會の展覽會にも是非出品するやうにと、先生から切なる勸誘を受けましたが、俗務多端、遂に筆執る暇がなく、その意にそむいたのは洵に遺憾であり、また申譯のないことでありました。

その日の午前時分、私は、猿樂町の小野鷲室先生の玄關に立つて先生は、先年物故せられ、最早其の温容に接することは出來ないし、自分の作品をも聊かながら備的に取扱ふやうになりました。

◈ボーイの話

平田久雄

京電武者さんには、朝鮮ホテルのボーイが感心して居た▲といふのは、この三四ヶ月前、京城の老妓――一名婆族が、四五人で寄つて一流どこの紳縉三四名をよんだ▲無論、ホテルである▲そして宴會費は、その婆族連から、その場で拂つたが、一人負擔ざつと七圓……外のものはノホ、ンでゐたが、武者さんだけは『イヤとんだご厄介をかけた』と、丁寧に御禮をいつたものだ▲見てゐたボーイ『あの人は全くえらいですね……』

◈禪はホン物

石川利夫

水害の當時、よくつとめたのは、知事さんである。幾晩となく當務の人々と徹夜した▲それがために當時頻などこけ落ちてしまつた▲しかし、その沈著さ、精勵さは流石で、若い記者の間では『やつぱり名知事だよ』『イヤ知事の禪はホン物ぢやよ』――それは實際好評嘖々だつた▲禪といへば、京城商議の大村さん、この方の先覺であり、人物も腹も、近ごろスツカリ出來上つたといふ評がある▲ツ道場でも開くか。

京城雜筆

◈漫畫三尊記

石川利夫

このページにある漫畫三人物は、東拓の三尊であります、右尾崎さん、左二宮さん、中央が志村さんであります、改まッての人物紹介はよしませう▲兎に角よく似て居ることは、二宮さんが『志村君、ハ、、、、君そつくりだよ』といはれると、志村さんが『支店長、首の邊がとても似て居ますぜ、ハ、、、』と、互に自分のことは、忘れてしまつて感歎し合つて居られることで、いと明白▲そこで、この名畫の執筆者ですが、實は東拓技師山崎義行氏……實にスバラしい妙腕でせう▲も一ッ、之は何かのつどひの折、冗談半分、餘興半分、一氣呵成さら〳〵とやつたのがこれ……どうも驚きましたね▲學校時代よつぽどノートにいたづらされた人でせう▲兎に角大方各位に、大聲叱呼、敢て御吹聽いたします。

◈夏雲奇峯錄

平田久雄

有賀さんの產業道樂（？）といふ奴も、久しゃのである▲朝鮮の土地に、初めてれんげ草といふ奴を試作したのも、同氏であらう▲イヤ、この山野に、落葉松が適しやしないかと、こそつり苗木を植えたのも、同氏である——それは、鎭南浦稅關長時代——ざつと二十年になる——それから漢江に鮎のそだゝぬ筈はないとて、卵を入れたのも同氏（これは三四年前）である▲兎に角考へる人だ、そして一人で實行出來ることは、默つてやつて行く人た。

り寄せて補充する騒ぎです。

一人で實行出來ることは、默つてやつて行く人た。

金剛ハガキ便り

朝鮮鑛業會　徳野眞士

京城雜筆

○

あこがれの長安寺行きを決行する事となりました、私もいろ〳〵都合して今日西崎さんと一所に京城を立ちました。山の便り、水の歌、それらは何れ向ふから御送り申上げます。

當地では夕食後自働車を驅つて白砂青松の松濤園を散歩致しました。篠田次官をバンガローに訪問致しましたが、御家族だけで御本人はまだ見へて居りませぬ。

あなたもお暇をつくつて、せめて一週間でも長安寺にお遊びに來るやう、西崎さんが申して居ります。それから雜筆八月號は『金剛山長安寺ホテル』宛にお願ひします。（八月一日夜、元山にて）

○

溫井里から長安寺迄、十一里の山路を轎で來ました、足の下を霧が走つたり、花菖蒲や百合や薔薇が一時に咲いて居つたり、長い道中も飽かずに通れます。たゞ今日私の乘つた轎の人夫が、私を轎から放り出して足に負傷さしたのは遺憾でした。おかげで山の勇者もこゝ二三日は謹愼の外ありますまい。（八月三日、長安寺ホテルにて）

○

長安寺ホテルのバンガローは誠に氣持よく候、老樹の間に自然石を叩き込みたる長き廊下ありて、すぐ玄關先から苔蒸した石が並び居り候、裏には清流あり、奇石多く、其採集にても一兩日は夢中に過ごされ候。

今日までは釣をするのみにて山には登らず、歌も句も無論出來ず朝夕は冷氣甚だしく、寢臺に餘分の毛布を借りて、一同風をひかぬ要心を致し居り候。雜筆正に頂戴仕候。（八月五日長安寺にて）

○

今日やつとの事で白雲臺に登りました、足にはまだ繃帶をして居るが、それでも一人前は歩きます奇峯亂立だとか。激流奇石の間を走るとか、金剛山でいろ〳〵な形容詞を考へるのは野暮の骨頂だと思ひます。幽芳、蘇峰、桂月の諸先生に其の方面は一任して、私共は神斧鬼削の怪奇に呆きれて居ればよいと思ひます。誰れかゞ言つたやうに、すべてこれ驚きの山驚きの谷であります。

山には到る處に道案内の木標が立てゝあります。それに高木背水氏が根氣よく庵の説明や登山者の注意事項を掲示してあります。

それから今日の案内者は、其の容貌が似て居る所から伊藤公で通つて居る鮮人です（八月六日）

○

どうも運動するせいか、時々お櫃を空にして一同で大笑ひする事があります、ホテルからパンを取り寄せて補充する騒ぎです。

川では私が大物釣りの專門家になつて仕舞ひました。尺に近い厭魚を岩蔭に見附け次第釣り上げるのです。魚の大物は獨特の秘術で必ず成功しますが、碁の方の大物は折り〳〵逸して困ります。仙境に來ると仙術を用ゆるなどと、エライ氣焰を擧げられます。

川の瀨音と虫の聲との外には、時折り附近の鮮人家屋から砧が響いて來る許りで、夜の靜けさと凉しさは全く別天地です。三日の夜五葉の松と樅の密林の上にかゝつた月を、舊の十三日だ十四日だと話し合つて興じましたが、あなたの好きな『長安寺一片月、萬戸擣衣聲』は此處で作つた詩ではないかと思はれるくらゐです。（八月七日）

○

今日は望軍臺に登つて來ました途中で嶮岨で同行者がなく、私と案内者と二人きりでした。

望軍臺下の兜率庵は、昨年の山火事で燒けたが、傍の小さな祠だけが殘つて居ります。其の柱に菊地幽芳の名があり、扉には大谷尊由師の樂書があります。氣をつけて見たが流石に桂月や蘇峰の名は見出しませんでした（八月九日）

○

長安寺の前に萬川橋といふ古い木橋があります、其の橋が今日崩壞墜落しました。これはお寺の橋だと見へて、取片附と同時にもう大工が新らしい橋の架設にとりかゝつて居ります。そこらのお布施で暮らす寺とは所帶向きが違ふやうです。

今朝自働車が金化を出たさうだから、それが來たら私は第一番の汽で歸ります。（八月十一日）

——僕の觀た——

京日雜感

白晝夢

◎

副島社長は、愛國者である。一時間も話して居ると、國家々々といふ言葉が、矢鱈にこつちの耳をうつ。

◎

それ程の愛國者が、日本酒、日本料理、日本宴會大嫌ひといふのは面白い。

しかも、洋酒は大の好物で、朝から晩まで、チビリ〳〵と聞こし召して居られる。

量の點でもこれ程の豪のものは、毛唐にも一寸珍らしいとのことだ。

◎

いつも伯爵閣下らしく、規帳面にして居られる。

◎

宮部副社長——新聞のことはとても詳しいものらしい。

しかも、無類の精勤家と來て居る。

下のものは、樂ではない。

◎

東京から所謂新來種を移入し新聞はたしかによくなつた。

日本一の編輯者と言はれただけのことはある。

◎

但し在來種必ずしもクズばかりとは限つて居ない。

宮部さん、可愛がつてやるがよからう。

◎

どこか安達遞相に似て居るところがある。

さうだ横顔なんか確かに——

◎

主筆は、學者風の人だ。

昔の服部白湄氏以來、これほどの人はなからう。

社說もいゝ、對山錄もいゝ、なか〳〵意味深長で、上品なユーモアに富み、いゝ讀物だと思つて居る。

長く京城に居てもらいたいナ

◎

角田君は、よくつとめる。

立派な編輯局長だ。

いゝ歌を詠む人だが、このごろは、一向なまけて居る、少しは詠め〳〵。

◎

新しく來た人では、編輯の山田君、經濟部長の笠神君など、評判のいゝ人である。

◎

何としても人才は多い。

西村君、寺田君、高須賀君、それに河西君など。

◎

營業は、河谷氏去り、眞砂君逝く、どうせ舞臺一變りといふ處だらう。

——借家の話——

貧乏の話

平田久雄

◎釋尾東邦先生の無遠慮は、きのふや、けふに初まつたことではないが、仲々痛快な處がある、この間もひよつこり我社町人子を訪ねて來て、話のついでじろ〳〵見廻はして居たが『もつとどうかした處へ引越さうぢやないか、あたら文士これでは全くの陋巷に窮居すちや……』人の家を、糞のやうに評して一流のフフン、フフンといふ奇笑を發して居る、處で亦町人の答へがいゝ『イーヤ、これで丁度いゝ、住めば都さ、フフン』だとさ。

◎德野鑛業會と、我社町人氏とは、意氣相投じ、貧相許して居る仲である、この間兩人相會し、何とか貧乏驅逐策はないかそれには貯蓄に限る、毎月奮發して△△圓づゝためやうぢやないか……』頗る殊勝な謀議を凝して居ると、そこへのッそり浴室から出て來た西嶋さん『君等は、馬鹿な話をしてるね、今から△△圓ためるとして、何年生きる、なんぼうたまる、つまらん相談をしとる……』ピシリ。

◎いつかも書いたやうに、家主岩間さんが『八』といふ大々的貯金宗、それに先輩樂堂氏は右のやうに一喝する『ハテナ』

◎金も餘計は要らんな、四五萬欲しいと町人氏——そしたら將棋はかり指して、雜誌はスグに休刊か。

——近ごろの——

新聞瞥見

江渺々

◎この一二年間は、新聞社の國難期（?）ともいふ可きもので、京日初め恐らくきれこみとならない社はないだらう。

◎地方は、じみにやつてるから、亦た鈍痛的に不景氣が來るから、さうでもないが、京城各社は、實際同情にたへぬ。

◎えらいのは、有馬日日——あのボロ新聞を買ひ込んで、とう〳〵あれまでに、仕立てあげたのは、全く敬服。

◎有馬日日は、人を使ふのにあまり枝巧のある人間ではないが、どこかいゝ處があるのだね——浪人肌のズイ分悍馬式人物も、心服してよく働いて居る。

◎營業の鎌田君、編輯の森君——一騎當千だね。

◎だまつて使つて居る處は、眞似は出來ないね。

◎これで、景氣一回復したら日日こそ、世間をあッといはすものかも知れぬ。

◎朝新の竹田津といふ人は、會つたことも、話したこともない、けれど營業にも、編輯にもよく精通した人といふから、これから大にやるのだらう。

◎朝新の廣告部には、昔から腕ッこきが多い。

◎使ひやう一ッでね。

◎編輯の和田君、野崎君、久松君——よく働くね、もう少し社が見てやるといゝ。

◎昔ながらに營業偏重はひどい。

◎どの社でものことだか、營業の人間は、三百圓以上の月收のあるのは珍しくなく、記者で百圓以上は殆どないんだからね

◎京城では、この不合理をやめんといかん。

◎そればかりでない、記事が營業から左右されることすらある。

◎イヤ、編輯で攻擊して居ると、それをタネに使つて、社主自らがヘンな金儲けさへする。

◎獨立を叫びたい。

◎牧山君歸らず、權藤君一人で働いて居る、そして社内は却つて太平。

——世間人間——

見聞帖

吉田莊一

◎馬野さんの府尹ぶり、どつしりとして、立派なもの也。

◎『ウン、忙しいには忙しいが、ナニこれで、ヘタな俳句くらゐは詠めるよ』餘裕綽々、どこか大きいね。

◎河内山さん、むつつりして居るが、實は非常に親切な人——社内の結束いかにも堅し、陰忍三年、とう〳〵五分の配當をしたぢやないか。

◎社長默々、社員は一生懸命

◎深尾さんは、惜まれて居るめづらしい溫藉の人。

◎今年の商議戰に、堀内さん出馬する模樣、第三者が擔ぐ——いゝ商議役員でせう。

◎有賀さんの水害對策、贊成論湧くが如し、あれは多年の懷抱——專門家があれに、實行細目をつけると、申分なし。

◎谷々の水は、うえつけで乾涸する、丁度そのあとに雨期が來る、そこで自然利用の谷池、峽池をつくつて置けば、水害を緩和し得て、夏中用水にこまらぬといふ寸法になる。

◎金を使はずに、儲けるといふ奴——これを實行したら雨師水伯も茫だ然らう。

◎鮮銀野中總裁（及び鈴木副總裁）忽然お首となる、驚きましたね——そして大藏省の整理案といふもの、あれこそ徹底的

◎但し行内の人や、株主には當分御氣の毒——好況時代に、めちやな重役を持つたが災難。

◎本町田中時計店主、いゝ體格だと思ふと、柔道三段——昔は大にやつたものさうナ、おまけに、うまれは長脇差の本場。

◎大朝井上氏、早いころから加藤松林の繪を買つて居た、松林この春首席入賞、自然と井上氏の鼻、向ふへ外延する。

◎山口銀行の田口さん……の後をうけて、精勵奮鬪これつとめる、實際エライとの評あり。

散歩

總督府醫院
醫學博士
廣田康

暖い初夏の夕ぐれかけて××公園や△街を逍遙するのが私の一つの樂しみである、丁度時刻が富有閑佳な晩餐の卓に待たれる御客達の通る頃だ、これらの人々がすつきりとした氣持のいゝ白胴著をつけて居るのを見ると何となく落付いた愉快を覺える、初々しい黑の禮裝と純白に裝はれた胸の裡に漲つて居る種々な感情を私は讀むのである、一體私は引込み思案の男で大概お定まりの時刻に自宅で質素な夕食を濟ますのが常である、滅多にそうした晴れがましい招待の席へなど出かけることもなく、立派な白胴著も持合せがない、けれどもかうした場合の散歩に出かける私の服裝も矢張り黑である、これは職業上寔に止むを得ないので、牧師、醫者、葬儀屋の番頭何れも御多分にはもれない、我々は嚴肅な職業に從事して居るのだから黑い服裝をする、いかにも悲しそうな服裝ではある。

私はこうした靜かな散策をしながら招宴に馬車を驅る婦人達を眺めるのがまた一段と愉快である、私は既に夕食をすまして居る、私はこれらの佳人が急ぎつゝある食卓に待たれる身ではさら〳〵ないが其實は是等の御客達に數等勝る歡喜を感ずる、私は敢て波斯の詩人を羨まない、又アラビヤの旅客を嫉まない、私は波斯の工匠が夢みたより以上に美麗な街を歩み、とかく熱情的誇張癖のある東洋の文人が筆にして居ると同樣な纖妍たる女王を瞥見するを得るが故である。

無論その容色ばかりではない、其衣服調度の華麗さはどうだ、身に纏ふはたゞうらゝかな春の日影である、綠なす黑髮は燦爛と輝いて居る、首といはず腕といはず將た指といはず、數多き寶石、目にふるゝもの悉く光である、美々しい絹も後れじときらめき、輕やかな笹へり微かに搖ぐと見る間に日影の明滅する中を佳人の車は早や遠く去つてしまうのである。

繰り返へして言ふ樣だが私のからだこそ食卓には列しない、けれども、私の想像は如何なる時でもちやんと食卓に待つて居るのである、佳人の馬車がぴたりと止まると白い手袋をした使人が廣い戸を開ける、錦繡がちらと輝いたかと見るうちに戸は閉まる、私の想像もすらりと中へはいる、大きな姿見に長々と寫つた佳人の面影が目には入る、我こそ絶世の容色を有つて居るのだと考へると、彼女の頰には微かな紅葉を散らすのがわかる、滿堂鳴りを靜める、次いで一としきりしとやかな挨拶が交はされる、列席の淑女達の視力が敏活に動いて衣紋の果てまで見極められる、紳士諸君はたゞもう其美貌に恍惚となるありさまが私の想像で手にとる樣にわかる、私の想像はかくれ簑をつけて佳人の伴侍となつて居るのである。

私はこうして却て身體その場に莅まないといふばかりで悅ばしい晩餐を味ひ、芳醇な美酒に醉ひ、氣の合つた人達ばかりと自由に愉快な談話をするのである、私の想像は佳人才子の言葉をきゝ、其思想感情をも洞察して剩さない、私の想像は恰も佳人の思想の華の中に遊んでその蜜を吸ふ蜂である、目に醜惡無情の輩を見ず唯善美の人と物とを見るのみである、客は皆品位具はり溫朗以て誤謬を正し熱情以て弱惡を彈ずるの士のみである、凡て眞勇と忠實を重んじ、不誠不正を擯斥するの人である、唯に卓上の珍味を賞揚するのみでなく人性に存するより偉大なる可憐と優美との美德を知て心怡然たる人のみであると信じて疑はない

そろ〳〵夕暮れとなる、ゆるゆる町筋を戻るとある家の窓から灯が洩れて居る、窓かけの薄霞一つが浮世を隔てゝ內部の樂園をほの見せて居る、一臺のピヤノのまわりには少女達が群れて居る、小さな卓を前にして安樂椅子に倚つた老人達のもの靜かな團欒がある、忽ち颯と風が吹いてゆらぐか如き光明が洩れ、湧くが如き音樂と薰り高い蘭麝の香が迫つて來る、私はたとへ偶然にでもそうした神秘境を犯すかを恐れて夕闇の中へと退くのである。

○

この『私』はほんとうの私ではない、何でも雜筆先生への責を塞がねばならないので一寸カーチスみもたへてすべたかりけり
妻子らの安否にはかに思はれてひ

の思想をたどつたまでです。（一四、七、一〇）

が其實は是等の御客達に數等勝る歡喜を感ずる、私は敢て波斯の詩

ない、何でも雜筆先生への責を塞がねばならないので一寸カーチスの思想をたどつたまでです。（一四、七、一〇）

京城雜筆

洪水の歌

野田醬油　市山盛雄

水をきりわが乘る汽車は辛うじてのがれ來にけり梧桐洞の驛
おもはざる方に島あり一面の泥海となりて波をたてつゝ
島とのみ思ふにあはれ泥海の中に屋根みゆ雨雲たれて
さなからの海となりけりみのかぎり波をたたせていやはろかなり
水の爲めかかる災害のあるとしは思はれぬことをいまのうつつにどろ海になかば浸りて傾ける家あり水は刻々に增す
れどますます眼は冴えて來つ刻々に水の增しゆく知らせのみ望

仁川茂木氏宅に泊りて

ろうそくの灯のしたにおもをよせうれひのうちに夜はふかみつつ
ろうそくの焰のゆれをみつめつつ涙にぬれて語りふかすも
絶えまなく吹き募り來る夜嵐をきゝゐつ吾子をおもひゐにけり
死の豫感ひしひしと胸にせまりきてたまりかねたる涙をおとす
たゞみつる電話もいまはたたれけり不安のうちに二日は過ぎつ
暴動のしらせをうけて皆のものよせあつめけり雨夜の事務所
白さやの劍をぬきてねむれざる夜半をひそかにみつめてゐたり
枕もとに劍をおきてねむらむとすみもたへてすべなかりけり
妻子らの安否にはかに思はれてひとよを寢ずて夜はあけにけり
店のこと妻や子のこと部下のこと思ひ出されて堪えられなくに

水害の跡

二村洞は家も屋敷も流されて砂の河原となりはてにけり
はらからのあと片づけをする家のかたはらに子らの砂いぢりかも
人間の骸さがすと泥水に棹をいれをり舟の上より
拾はれた二つの骸線路上のつよき陽ざしに並べてあるも

頬杖ついて

平田久雄

◎例の大洪水の當時、三坂通の鮮銀舍宅裏から、靑い人魂が出る——實際見た人がある。

◎すると、同じ銀行の人が、松原さんを訪ね『見ましたか、アレは句になりませんか』そつと囁くので、俳人大に好奇心を起し、ちよい〳〵起きては、カーテンを引つ張つて見たが、先方更に好意を有たず、一向御出現の容子なし『サテは擔がれたかナ』

◎同じ時分に、電車に乘ると『△△さん〳〵』と懇意さうに呼ぶものがある、見ると軍人二人、ハテ洋劍氏には知合はないがと、變な顏をすると、先方苦笑して『私ですよ〳〵』よく見ると、三週間入營中の野崎氏（朝新）だ。

◎人間は服裝で變るな——金や地位で、見違へるな、我々だつてこれで、大邸宅、僕婢何十名、出入皆自動車といふことになると、拜趨連中が押すな〳〵か。

◎平山牧場主平山君は、非常に苦勞した人で、話が面白い、十四五年前同業大競爭の結果、乳價二錢（一合）といつたことがある、その頃同君は、うちの牛乳は質が違ふ、到底八錢以下には相成らぬと頑張り、それがために、差押を食ふこと二十回、轉宅七八回——全く踏んだり蹴つたりだつたが、近年やつと最後の勝閧をあげた處だと。イヤ痛快々々。

この『私』はほんとうの私では

三人を羨む

京城日報社　河西青苔

× × ×

殖銀の有賀さんに京城府尹の馬野さん、それから今度黄海道知事になつた元專賣局の今村さんだ。この三人を羨む。

有賀さんは人によつては、烏濱冷たく見えることが有るさうだ。無論あれだけの銀行に頭取として內外の評判宜しく重任した程だから有德の人であらうが、下らぬお世辭や有り來りの甘い挨拶なんか弄さない人であるらしい。朝鮮ホテルで名刺を出したことがあるが是は狎れ難いなと思つたことがある。

馬野さんと來たら最も露骨で既に定評がある。思つたことは何によらずいつてのける。歐米から歸つて書いた『萍の半生』などには普通の官吏の到底いえない、思ひ切つたことをいくらでもいつてのけてある。

今村さんもまた同じ調子がある人を人嗅く思つて居ないんだらうと思はせられるやうな目に度々出合ふ。

三人ともにそれ〴〵ある程度以上は『勝手にするがいい。がり〳〵は御免』といふ腹が出來て居ると見て間違はぬやうだ。何れもこの意味で出色の人物の方であらう。

× × ×

處で問題は、三人の『がり〳〵御免』の原因だ。

有賀さんは信州伊那の豪農、アルガがほんたうだが朝鮮ではアリガといふ。宛かもカサイがほんたうだが朝鮮では僕のことをカワニシといふが如し。

馬野さんは山口縣大島で、庭先にある一里餘の島を築山にして御領主樣のやうに椽で涼を納れ乍ら夏目漱石の『猫』が水甕に落ちて散々もがき拔いた揚句に

『もうよさう。勝手にするがいい。がり〳〵はこれ限り御免蒙るよ』と、前足も後足も、頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

といふ知死期の一齣がある。幾度讀んでも羨ましい猫の覺悟だ。

× × ×

四周の壓迫に押しへしやげられて勝手にするがいいと迄は、屢々思ふこともあるが、がり〳〵の方は何時になつても到底御免蒙れさうもない自分だ。それも亦頗る下手なひつ搔きやうで、がり〳〵がり〳〵食はなきやあ食はなきやあと盲滅法にひつ搔きまわし、五本や六本の生爪のはげたのは萬創膏張る餘裕もなく、手足を血だらけにしてそれでも未だ却々御免蒙る處ではなささうだ。

× × ×

しかし流石に生爪は痛い。痛いにつけても、切に思ふのは世渡りの面倒さだ。否世渡りに要る所謂處世術といふ術の面倒さだ。

所謂處世術といふ術は、尾上松之助や猿飛佐助、鬱隱才藏などの忍術といふ、單に奇拔なだけで他に取り柄のない術などより、遙かに〳〵科學的で文化的で且つ難解深刻なものである。ために明治、大正の昭代に於ては、これに關する種々有益な研究が行はれ、あまたの著書や講義錄が出版されて居る有樣である。

× × ×

こんな面倒な術は、到底手に負へさうもないから、何時でもいつそ投げ出せたらと思ふ。無論投げ出し位は出來ぬことも無からう。投げ出すのに何の手間暇とも思ふがしかし考へて見ると、食はなきやあの問題に對して餘程強い成算を持つて居なければ大變だ。

× × ×

處世術なんて下らない術は全然不要な人、そんなものでがり〳〵ひつ搔きまわさなくとも充分に食はなきやあの成算のある人、さういふ餘裕のある人々を誰よりも羨ましく思ふ。

今時の世は、たとへ勅任官になつても、會社の取締役社長監査役になつても、皆滔々としてこの術のためにこそ、憂き身をやつすのが天下の時流だから、況んや高等官にも重役にもなれぬ末流の人達がこの術のため、一生苦勞の絕ゆるひまなき水鳥の、あぶ〳〵と游ぎまわつて居る有樣は、理せめて如何とも憫れな話。

あゝ憫れだなと思ふにつけて反射的に、羨ましいなとすぐに頭に來る三人の代表的な人物がある。この人達にがり〳〵は要らない筈である。大いに羨ましい。

官吏なんか下らないから歸つてこい〳〵といふ御親父さんを持つて

◈遠路御診察

に〳〵科學的で文化的で且つ難解深刻なものである。ために明治、射的に、羨ましいなとすぐに頭に來る三人の代表的な人物がある。

官吏なんか下らないから歸つてこい〳〵といふ御親父さんを持つて居る人ださうだ。

今村さんは仙臺へ歸つて行くと三太夫はじめ家來一同村境まで出で迎へ『且那樣には好うこそお歸り』といふ位のものださうだ。

いづれも豪勢なものである。

× × ×

この人達にがり〳〵は要らない筈である。大いに羨ましい。

嘗て、三萬圓あつたら田舍へ遯世して土いぢりをやるがなあと、嘆息した雜筆社長松本さん。

それにすぐに同感した僕。

矢張り浮世に未練があるらしい處が、がり〳〵黨たる證據であらう。

にある一里餘の島を築山にして御領主樣のやうに椽で涼を納れ乍ら

京城雜筆

或夜の感銘

西京屋京染店　安達清太郎

連日連夜、ふりつゞいた雨もあとかたもなく、からりと晴れた。

幼い頃には、日本晴れだと一人が言ひ出すと、イヤあすこの隅に少し雲があるから日本晴れではないと、口を尖らせてやり合つたものだ。

雨ふれば雨を恨み、蒸し暑ければ雨ほしいと天を睨む草も木も虫も鳥も、不平を洩らしたためしは聞かぬが。

○

青年會の一員として、さき頃龍山へ出動して、歸つて來たのが十八日の夜二時、土砂ぶりの中をひた走りに走り廻つたので、咽喉のかわきが大變である、目についたのが中元に貰つた飲み殘しのサイダー一本、これ倔强と手にとつたがビール抜きがない。たしか水屋の中に？とにぢり寄つて、抽斗を引くと仲々あかない、力まかせにグッと引くと七三に少しばかりあく、エヽ面倒だと更に引くと、益々こぢれてしまふ、とう〳〵怒心頭に發して滅茶々々に引くがドウにもならない、形相は羅刹惡鬼と變じて、鏡でもあつたら、われ乍ら恐ろしい顏だつたと思ふ。

家内を見ると、三人の子を拘きすくめて、畳のつかれでぐつすり眠つて居る、癪にさわつて大喝一聲――と思つたが、何かの力、無聲の力が自分を制する。

何事も難有いと受取らねばならぬ、惡い時の原因は大底自分にある――と敎へられた先生の言葉がむら〳〵と胸のうちに蘇つて來る。

さうだ――。心を靜め、氣を落ちつけて、も一度そーッと抽斗を引く、と抽斗はする〳〵と手に隨うて拔ける。

あゝこゝだナと自分は、しばし飲むことも忘れた――。

○

醜いのは憤怒の心である。

しかも安水屋をあてがつたのは誰れだらう。

自分は今やつと、すが〳〵しい氣持になつた、咽喉をとほる清涼水のうまさ。

◈遠路御診察

吉田莊一

殖銀森さんのお妹さんのお婿さん――汁氏といつて京大醫科でも新進の大家である▲昨年森さんが脚部をわづらい、そのことを通知すると、獨逸から『その脚斬ること待て』（當時洋行中）と奇電を發して、瀨戸さんを驚かした▲處が今度森さんの奥さんが、藤井病院入院中又々『斯ういふ手當たのむ』『斯ういふ處置よろしいか』と警電しば〳〵京都から來るので藤井先生『こりや不可ん、こゝになると、總督醫院だ……』トウ〳〵奥さんそつちの方へお引越▲それでも辻さん不安でたまらず『どうですか、一寸容子を見に來ました』トウ〳〵京都から御出馬……そして當分御滯在……▲蒸し兄姉思ひの近ごろの美談。

◈漫畫拜見記

駒田亥久雄

雜筆八月號有り難う、今拜讀中であります。二五頁の『貧相な男』誠に上出來で見れば見る程よく似て來る所に繪の精神があるのでせう。私は仰臥――一寸斷つて置きますが私は六月中旬から病氣で引籠り當地の洪水も病院で知りました、目下尙靜養中でまだ床上げも出來兼ねて居ります――しながら今少しで『松本さん』と呼ぶ所でした。貧相ではない。勿論美男ではない、見合ひの寫眞？としては半文の價値もありませぬが先づ色男でしやうか。但し何う見ても營養不足の讀りは免れませぬ、此の頃流行のウイタミン何とかをタンと追加の必要がありますね。

京城雜筆

堀内さん

笠原ふみを

葱の枯葉のやうなヅボンに、パカチのやうな麥藁帽を手にして、ちゝぶやの店頭に立つた男。それは私の事。主人堀内氏に面會して談合する事數分。氏は吶にして吶に非ず、商人にして又文筆家。更に又若くして高齡。笑ふと妙に皺クチャなお顏になる。頭は手入れが行屆いて瑞々しい。御注意までに申上る。若しも二八乙女のお客でも來られたら笑はぬが得策であると。

守屋さん

笠原ふみを

『色男金と力はなかりけり』とは最早博物館にでも飾つて置くべき常套文句。此常套文句の叛逆人は誰あらふ殖銀の守屋氏。まだお若くて金融界の流行兒であること一般の夙に知る通り。さて氏を漫畫にする事の困難さよ、一平と雖もベソをかく。せめて髭でも無ければ花王石鹸とでも綽名する所。頤のカーブがそれを物語る。文章は一家の風格を具へ、この方でも名家である

◈旅のはなし

【三八】

◈博士と並辯

吉田莊一

總督府醫院の志賀さんといふ人は、よつぽどいゝ頭の持主だと見へ、大學を出て、三四年目に、初めて赤痢菌――それまで世界の學界に知られてなかつた――を、發見した人である▲つまり世界的赤痢學者だ▲が、博士の熱心は、今も尙一貫し、現在でも赤痢菌を培養し、日々研讃をつゞけて居る▲學者らしい質素なところもある人で病院の晝食――上辨四十錢、並辨二十錢――とあるのを、下級の醫員と一所に、並辯を食つて居る▲中味は麥飯で、おさいはかぼちや、じやが薯である▲俳句をちよいちよいやられる▲繪の方は、現に平野天桂氏を、自宅に請じて、清閑に勉强して居られる。

◈京電頌德記

平田久雄

大洪水の當時、京電會社のとつた復舊工事振り、それは敏速そのものであつた▲市民は、三晝夜ならずして、光りと動力とを、とり戻すことが出來だ▲我々は、大に會社に感謝してもいゝと思ふ▲京電會社といへば、その仕事が市民の日常生活と、しつかりからみ合つて居る關係上、いつも何の彼のと、小言をいはれ通しである▲中にはズイ分酷論もある▲それだけ、いゝことをした時は、十分謝めてやらねばならぬ、誠意を酌んでやらねばならぬ……▲今度京電では、あの休燈當時の料金を、割引するさうだが、一寸痛み入りますね▲兎に角、あの大精勵振りに對しては、大々的感謝を捧げる。

兎に角、あの大綺闘振りに對しては、大々的感謝を捧げる。

京城雜筆

敗者の愚痴

元『趣味の世界』　久保田卓治

私は雜誌經營の失敗者である。『趣味の世界』といふものをやつて、さん〳〵に失敗した。今更ら過去を顧みて、敗將談兵でもありますまい。

○

けれど、二年間の經驗に照して、まことに遺憾だと思ふのは、世の大會社、大銀行といふものゝ、刊行物に對する態度です。それが政治雜誌經濟雜誌となると、全然追從的、迎合的です。殆んどボロ紙同樣のものにも多額の後援をしてゐます。――そして何等玉石を、判別する勇氣――見識がない。惡口を書かれますからな。處が、相手が趣味本位、藝術本位となると、忽ち態度から一變です。曰く『銀行の參考にならぬからな』曰く『會社と關係がないからな』かさにかゝつて、氣焰をあげて來ます。

○

こゝで、僕の鄙見の一端をいふて見ると、タトイそれが銀行會社の直接の參考とならずとも、その物自體が、何ほどか世を益し、人の心を慰めるものであれば、彼等は私利的偏見をはなれて、世のため人のため、之を支持するのが、それが即ち大銀行、大會社の襟度ではないかと思ふ。――それ位の識見はあつてもよからう――。然るに、一方には同型、同臭の政治雜誌、經濟雜誌に迎合屈從しながら、他方ではよき試み、新しき獨創に對して何等の雅量――好感を有たない。――これでは半島の荒土に、眞に美果を結ぶことは、先づあるまい。私は切に彼等の見識を要求する。

◈旅のはなし

吉田莊一

今村螺炎先生、東京から歸來、ひよつこりわが社を訪はれる▲マジメな東京談から一轉して、藝妓自滅論――女給勃興論となり一流の觀察思はず案をうたしむるものがある▲先生は歸途出雲大社に參詣せられ、例の『結ぶの神』については、つく〳〵思案（？）されたらしいが、その結論などは、とても振つたものだ▲それから先生は安來節の本場――安來町にも遊ばれ、一夕妓を聘して、耳を洗い、のどを養はれたらしい▲で、心あるものその眞髓を得んと欲せば、よろしく花月別莊でも清掃し、爛風器の百臺でもかけて、うや〳〵しく先生を聘したらドウだ。

◈ノートから

平田久雄

商銀と大銀とが合同したのはいゝが、そのため重役持株はフイとなるので、最大株主たる富田翁六千六百株を煙にしてしまつた▲でも最初からの合同論者――計畫者だけに『そら覺悟の前ですから……』一向泰然たるのはエライものだ▲翁についで、四千何百株かをフイにしたのが横山直樹氏、尤も氏は銀行を惡くした責任者とあるから、これは致方もあるまい▲平壤では、例に依つてワイ〳〵連が騒いだらしい▲うるさいな▲尤も同地の連中は、京城とは遥ひ別室でヤイノ〳〵と寶付けにかゝるやうなことはない、大聲叱呼、公會堂でセイ〳〵勇壯なとこを見せればいゝのだといふから始末はいゝ

古陶雜感

淺川伯教

○

古來日本人程陶器を愛し且つ理解して居つた國民は少い。

明智左馬の頭が松長彈正を坂本の城に攻めたのも一つの古陶器を欲しさから軍を起した。彈正は敗死と共にこの名器と心中した。

又左馬の頭は其死に先んじて自分の名器に目錄を添へて敵の陣中に送つて居る。

又信長は本願寺と石山に戰つた時敗北した其和睦の證に、一文字茶碗と云ふ朝鮮茶碗を本願寺に送つて居る。今も本願寺の寶物と成つて居る。

又本能寺の變の時には有名の文琳の茶入れを槍の先きにつけて敵中に送つて居る。

之れは皆天下の名器の失はるゝ事を惜んだ心からである。

支那の人が書畫や古名器を愛した餘り遺言によつて自己の死體と共に全部を副葬せしめた話しに比較して面白い對照だと思ふ。

○

希代なる秀吉の力と智略をもつてしても、博多文琳の茶入れはどうしても、神谷宗丹の手から取る事は出來なかつた。六千餘州を手にし、明に迄手を延ばさんとした彼が、一茶人宗丹の高さ二寸に足らぬ茶入を如何ともする事が出來なかつた。

秀吉は垂涎三尺置く能はず、遂に一計を案じた、彼が九州名古屋に居つた時、宗丹に茶に招かれたを機會に自分の手に入れやうと目論だ。

即ち小性に命じて

茶會の中途で自分が退場する、そうすると彼宗丹は驚いてまご〳〵するに相異ない。

そのどさくさのまぎれに茶入れた盜んで出る樣に……解決は後の事だ。

と小性に命じ。心に決めて臨んだ豫定の通り茶會の中途で殿下退場と來たので、皆驚いた。

處が小性の方が、却つてまごついて居ると、何時の間にか宗丹は床の茶入れに紐をつけて首につるして秀吉の見送りに出た。

秀吉は生れて始めて頭を掻いた。宗丹の死後この茶入れは、黑田家に納まり永代五百石に換へられ宗丹の子孫は三百年來五百石を受けた。この茶入は今も黑田家にある。

元錄十五年の赤穗義士の事件も原を探れば吉良上野が淺野家の狂言袴と云ふ高麗燒の筒茶碗が欲しかつたのが原因らしい。

播州皿屋敷の事件も、發端はお菊が、明染附けの皿を割つて御目玉を頂戴したが始めである。

【四〇】

石川五右衞門の千鳥の香合の傳說、大德寺の古掃部の木左衞門井戸、こうした傳說は非常に多い。

一つの茶碗に生命の取りやりから、城とも取り代へる程の愛好心は一寸今から其心境の理解に苦しむ位である。文錄慶長頃に黃金二百枚と云ふ朝鮮茶碗は少くなかつた。

然し價の高いものが必らずしも可いとは限らないがこの時代の人々が如何に陶器に對して浮身をやつしたかが想像に餘りあると思ふ然も只簡單に何でもないものを愛したのではなく、勝れた叡智と直覺の力をもつてして總べての人の認めたものは矢張今見ても可いものである。

○

そうして殘されたものが、現今も傳はつて居る。博多文琳は黑田家に、本能寺文琳は三井家に、油屋肩つきは雲州家に、木左衞門井戸は大德寺に、一文字茶碗は本願寺にある。

優秀の工藝品を愛する心は引ては日本の工藝美術の發達の第一原因を爲して居る。そればかりでなく日本の海運の發達の原因を見ると一つの茶入れや茶碗を欲しさに朝鮮、支那、安南、南洋へ、小さな木端舟をあやつゝて生命をまとに掛けて往復して居る。

そうして品物の善惡を判定する力が出來、知らない異境のものを愛し、之れを製作するに可い暗示を受けると共に、對外的に商機と云ふ樣のものを心得て來る。夫が爲に開國早々日本の工藝品は世界的に相當の位を占める事が出來た

工藝美術を愛好保存すると云ふ事は來るべき時代に對して之れ等の優秀品を殘すと共に其時代の作

彼が、一茶人宗匠の高さ二寸に足らぬ茶入を如何ともする事が出來

藥か、明染附けの皿を割つて御目玉を頂戴したが始めである。

事は來るべき時代に對して之れ等の優秀品を殘すと共に其時代の作

京城雜筆

品及び人々の趣味を高き位置に進める事が出來る。そうして總べては美術工藝品が消耗品の位置を離れる事に成る。而して多くは工藝が、之れから出發する。

日本現今の工藝の其源を探れば多くは封建時代の大名の御用品の製作から始まつて居る。

秀吉の文錄の役は日本に新らしき黴業を起した事を外にして全く徒勞と云つても差支はないと思ふ此効果は秀吉以下諸大名の古陶を愛する趣味性から生れたものである。

美術を愛し理解する事を閑人の遊戯の樣に考へて居る人の多い處には美術も起らなければ工藝も起らない。引いては眞の工業も起らない。

○

昔はかく迄優秀の物を出した朝鮮が今出來なくなつた原因は李朝中期後の上流い人々に理解がなく反つて政爭の方が面白かつた結果だと思ふ。

之れはいつの時代でも同じ事で日本でもそう成り兼ねない素性をもつて居る。

○

前に古の朝鮮茶碗の價の問題が出たが、現今でも東京の美術倶樂部邊の賣立てには必らず一つや二つの呼びものとしての朝鮮茶碗が見える。それは名物向きのものであつたりいつも價格が主位を占める。

それ等の實物を見て其元を正して見ると、大底は其時代の庶民の日用品で、其時代には極安價のものであつたらしい。即ち現今の朝鮮砂鉢の位置にあるもので、一般的に見ると粗製のものであるが、其下手ものに極澁い調子の高い處がある。

この庶民の使用した一般から認められないものに美しさを見出したのは初期の日本の茶人であつた之れは始めは價などには全く無關係に草庵式の生活に用ひられたものであつた。

財界漫語

一水生

○

このごろ、どこの公會、どこの宴會に行つても、大底渡邊定一郎君の『一言』を聞くことが出來る。

一寸面白いなと思ふ時もある甚だにが〳〵しく感ずる時もある。

あれで、やはり京城の一人物といふワケかな。

○

生活にも困らず、どつちに向いても、氣樂のいらぬ人と聞いた。

結構な人間だ。

それ故、アノ通り正論（？）が出來るのだらう。

○

しかし、食ふにこまらずに、アノ程度の議論をするのは、何も天下の豪傑に待たんさ。

古いやつだが、それは支那人の馬車屋でもやるよ。

むつかしいのは、自田な人、富有な人が、輕はづみな言論をしない事だ。これは修養が要る

○

先生、眼がわるいだけに、だん〳〵あぶない方へ、針路をとつて行くやうな氣がする。

こゝらで一休み、修養といふものを、ちよつぴりやつて見てはドンナものか。

○

釘本氏の引ッ込み際は、あまり千兩役者とも見へなかつたが不思議にわるくいふものがない。

今でも同情は相應にある。

どこか有德の人といへやう。

天日氏は、智慧も、金も、小手先の利くことも、むろん釘本氏以上である。年齢もズット若からう。

それで、どうして釘本氏ほど人氣がないか、同情がないか。

これは、人に聞くまでもなからう。利口な天日氏に聞くが早路だらう。

○

ひどく弱つとるのは、京取市場である。

開業しない前が、一番人氣がよく、開業してからだん〳〵影がうすくなる。

どういふワケなんだ。

周圍には、智者や策士が澤山居る。

それで、何とも出來ないとはこれこそ『今の世にあるまじき不思議』でないか。

丹波の綾部にでも、團參して見るか。

京城雜筆

勞農聯邦の表裏

廣江澤次郎

理想と實際

舊露西亞は滅亡した、而して赤旗靡り、ソビエット社會主義聯邦共和國が出現した、ロシヤ語のCCCP即ち英語のSSSRは思想的毒蛇の如くノタ打廻り世界を震駭した、赤派は舊制度の破壞、舊社會の變革には秋霜烈日的態度で莫大な損害、貴重な犧牲に頓著なく思ふ存分辣腕を揮ふた、舊社會に愛著の白系露人はドン々々國外に逃げ出した、赤派の橫暴慘忍は最も大袈裟に宣傳された、併し革命後八年を經過せし今日親しく勞農聯邦を訪問して見れば、大體に於て疲弊困憊の裡にも餘程秩序は回復し建設の一路に驀進して居る理想を基調とした新制度の研究亦た有價値とも稱し得る！、だが社會は學者の研究室とは違ふ、人間と云ふ我儘勝手な生物相手の政治は仲々厄介だ、赤色理想政治も實際の運用上故障百出！近來は勞働者もボツ々々不平を稱へ出した。

『共產黨が勞農階級の味方として活動して呉れたのは一九一七年十月革命迄であつた、吾々勞働者は舊特權階級を仆す道具に使はれたのであつた、今や勞農露國は共產黨幹部數人の專制政治である、現在の勞働賃銀は戰前の六七割に過ぎずして歐米の勞働者より待遇貧弱である、政府當局は『暫く陰忍せよ今によくするぞ』と熾んに宣傳して居るが是れ畢竟口頭禪である、吾々は誑まされたのだ』

是等の怨言は各方面から續出して居るが、何分軍隊と絕大の權威を揮ふ國家保安部が極度の壓迫を加へて居るのと、民衆夫れ自體が疲弊の深淵に沈溺し手も足も出ぬので如何とも致し難いのである。

極端な壓制

勞農政府は共產黨以外に反對黨を許さない、衆怨緩和の爲め無所屬が若干名あるが之れは御用派に過ぎない、形式丈けは代議制であるが事實は各權力機關を悉く占有する幹部數人の專制政治である、代議員たらん者は純勞働者にして政府の定めた團體の代表者が公撰した者であるが、此代議員が人形に過ぎない、議案は議長が議場に諮る三分ノ一でも四分ノ一でも賛成者があると議長は直に滿場一致原案通過と宣告し、サツサと議事進行させる、莫斯科やノーエン邊の無線電信で○○議案滿場一致通過等と報知して來るものゝ大部分は、先づ此種類と見て間違ない、玆に於て反幹部熱が白熱的に擡頭して來た、特に一代の偉傑レーニン氏歿後は重心點を失ひ常に動搖を來して居る、反幹部派の不平の數々を擧れば、

一、撰擧の自由が實際的には空文であり幹部數人の專制任命は不都合千萬ならずや。

二、言論を絕對壓迫し發言權を無視す是れ全く自由の有名無實ならずや。

三、勞働者の生活狀態は少しも改善されて居らず隨て勞働者の共產黨員は五パーセントに過ぎざるに非ずや。

四、共產黨各機關の官僚化殊に上級黨員の尊大は本來の主義主張に反せざるや。

絕對秘密嚴守主義の勞働聯邦の全貌類推に難くはない、官營萬能國だけに個人商の存在を喜ばない隨て個人商に對し苛斂誅求到らざるなく一般商人も泣いて居る、併し如何に政府が極端な壓迫策を執るも、商人中には鰻の樣にヌラリクラリ逃げ廻り乍ら權力と結び賄賂を使ひ巧妙に立廻り混沌中にも金儲けに成功する奴もある、特に內國商業自由と云ふ新經濟政策に赤が我を折つた時に此種の新成金が簇出した、併し喧傳されて居る程でもないし赤役人も亦此奴餘力あり儲けたなと睨んだが最後ドンドン重稅を課し吸ひ取つて仕舞ふ凡百の罪惡ゝ正其他一切の反對を鵜の目鷹の目で搜し廻て居る、國家保安部は不正商人と怪しき官吏を直に投獄して居るが猶ほ法網を潛る者がある、大概の役人は月給五十圓均一であるから一種の生活難からも來て居る。

綱紀施緩

勞働階級の者が一躍官吏となり國營商工業又は金融機關等の幹部となり急に立身出世したので交際費等も自然必要となり細君も贅澤を始め又過去八年間白系の政敵を追ひ去り君に角政權獲得せし今日でありまた迚に感激に堪へない處である！。

炎天の日雨降る夕べ、當て私は

京城雜筆

費等も自然必要となり細君も贅澤を始め又過去八年間白系の政敵を碎り去り弟に角政權獲得せし今日革命精神の施緩から人間としての本能的慾望が擡頭し段々物質慾に憧憬れ始めた、純粹の革命精神はトウの昔し龜裂を生じて居る、而して漸次赤色は人間味を帶びたる桃色に化しつゝある、現在赤の老官吏は左右を顧み小聲で『昔はロンヤも强武富國でありましたが亂暴な奴共が飛出して斯樣に見すぼらしき不安な國にしてしまいました』と私に語り終つて落涙した、私も同情の念禁じ能はざる者があつた、役人中にも純粹の赤は小數かも知れぬが孰れも生存上餘儀なく赤の保護色を塗つて居る、現在權力を把握して居る者程自衞上激烈な赤色が濃厚であるが彼等亦不安裡に棲息して居る、ロシヤ人は元來鈍感な民族であるから急激的か漸進的かは豫斷出來ぬが遠からずモウ一度變轉する事は間違ないさりとて王朝に復歸は絶對に望みあるまい。

私はロシヤ人が今後苦鬪十數年政治的にも社會的にも鍛錬陶冶された彼等が幾多の試練を經て完成した新制度新組織の粹を鬼め一致團結して國際的に活動し始めたら天下無敵爲くべき者あろうと想ふ是は杞人の憂と一蹴し去る事は出來ない、ご近所警戒を要す?、併し徒らに赤派恐るゝに足らず我日東帝國は佛教、基督教其他支那及歐米文化を能く咀嚼し消化し古往今來特有の日本文明を創造貢獻して來た事は史實の證明する迄である、赤派の斷行せし土地國有の如きも日本に於ては今より一二七三年前天智天皇の高城親王時代に決行された、而も其時は改造が根本的であり且徹底的であつた、一例を擧れば從來豪族の奴隷であつた人民を悉く解放して自由の民忠良なる國民とし又各豪族の私有する土地を悉く國有とし班田の法により之を平等に國民に分配された、幸ち多き日本は常に皇室が改造の魁を遊ばすのは國民としての榮譽でありまた是に感激に堪へない處である!。

炎天の日雨降る夕べ、常に私は赤い國にて目睹耳聞せし事共を回想し、身の安全なる皇土に在る事を感謝すると共に遙に試練中の惠まれざるスラブ民族に萬腔の同情を表す。

面影帖

吉田莊一

○

京日丸山主筆、書きかけのペンを、そーつと置いて『やアお暑いですな、はあ〳〵、では近いうち何か書きませう』ちつとも不時闖入を憤らないで、快くこつちの仕事の疏通を圖つてくれる、だけそれだけ、お氣の毒で、實際恐縮してしまふのである。

○

公論石森氏、向ふから『やア、この間は違約してしまつて……』さう言つて、頭を一つ掻き『今度は間違なくやりますぜ』ほんとにやさしいものだ、あれなら長唄に天下一品の美聲が出る筈。

○

『フーン、君は仲々勉强家ぢやねえ、フーン、君は生れは何處かね、フーン、松本君はどうしとるかねフーン、近ごろ弱つとるのウ……フーン、暑いでのウ、フーン』半ば思案し、半ば冥想し、半ば自ら感嘆する、飄々として風水の如しこれ朝鮮及滿洲社長の釋尾氏。

○

最後に京日副社長宮部さんの老巧振りを紹介する。

面白い雜誌だね、主筆ともさう言つて居ることです、原稿?、さう〳〵一度は書かねばならんな、處で△△さん、私達のやうに、朝から晩まで、筆を商賣のものは、原稿紙を見ると、もうそれだけで疲勞する。これが商賣人（記者）でないと、原稿紙を見ると、新鮮な氣力が湧き、一瀉千里やれませうな、そこに行くと我々は疲れてゐる、麻痺してゐる、鈍磨してゐる、いゝものは出來ぬと來る……。

論理が仲々精密だ……うつかり聞いて居ると、向ふに贊成しさうになる。

そしてその話の靜けさ、ものやわらかさ、親切さ……宮部さんは實際達人である。

水難前後

鐵道局　佐藤作郎

◇

京釜線と京元線の數個所が水害を被つた電報が頻々と彼の机に配達される。前夜からブツ通しの其善後策に彼の頭は可なり疲れて居る、其間に『漢江增水三十〇呎、堤防の某所危し』など警報がまた傳はつて來た。

彼は杜絶した交通機關の復舊と云ふ公の責任感から緊張し切つた心地で役所で執務を續けて居る。夫でも刻々と增水する漢江の危險に、家族の避難や家財の片附けなどを全然想はぬ譯けにいかなかつた。

彼の周圍には彼と同じ境遇の脅えを感じつゝある人達が執務して居る。自家の水難を顧る暇さへなく應急の公務に忙殺さるる其人達の心を動搖させまいと、彼は先づ自ら冷靜を失はぬ事に努めるのであつたが、此際に處して尙奉公の强い責任感に私事を擲つて居る人達の崇高の心を想ふと、感謝の念に涙ぐましさを覺えると同時に、兎角彼の心は惑き亂され樣としたねばならぬ。

車軸を流す樣な雨は未だやみそうにもない。捌け口の漢江水面がもう數尺も高くなつた溝の水は溢れに溢れて官舍町の處々に深い水溜りを慥へて居る。其中を脅怖と焦慮とで興奮し切つた男女の幾群れもがあわただしく行交ふて居る泣き喚ぶ音と叱怒の聲は軒打つ雨の轟きと半鐘の響きと合して凄慘の交響をなして彼の耳朶を打つ。彼は其朝萬一の場合の避難準備を家族に命して置いたが、夫は恐らく杞憂に終る事とのみ信じ、深く其等の準備に付ては意を用ゐずに居た。然るに今こうした混亂の光景に面接して、か弱い女――しかも洪水の片付けなどに一度の經驗もない――一人に放任して置いた家事が俄に心懸りになつた。

彼は膝に達する浸水の我家の前栽を踏つて、取敢ず家族を京城へ避難さした。そして幸に馳付けてくれた手傳の人々に依り家財の一切が床上三尺の高きに迄積上げ終つた時はじめてホット一息した。

◇

此間にも絶えず鐵道線路被害の增大を報ずる電話が相次ぎて、彼の心を益々暗々した。彼は又役所に急いだ。僅か一時間有餘の間に彼の家の前栽は一尺六七寸程も增水を示し、門外の道路は溜滯の濁水でもう寸地をも表して居ない。「鹽函や溝板が浮揚して怪物の如く點々黑い影を水面に投げて居る。日頃左程にも感じなんだ角々の電柱に灯る電燈が唯だ一つ往來の安全を保護する光明となつて水の上に流れて居た。彼は恐るべき水の勢に改めての脅怖を感ずるのであつた。

『增水四十二呎、漢江第一橋梁橋脚危險に瀕す』

心配しながらもよもやと考えて居た憂ひが現實化せんとする報告に接し、彼や彼の周圍の人達の驚愕は極度に達した。然し夫に對して如何とも手の出しやうがない、刻々の增水に、脅怖の念は忘れて天の暴威を只だ恨んだ。

◇

午後十一時過ぎて鐵道公園附近と鐵道工場附近の堤防を水は溢れ出でんとした。決壞防禦の人力の限りを盡した努力も横溢する水勢となつては何等の效果を齎すべき筈がない。

橋脚の盛土流失、堤防決壞、最後が遂に來た。宵から京城電氣の應急送電に辛うじて暗黑から救はれて居た邊りが忽ち眞闇となつた萬事休す。水神の殘虐性は阻む何物をも除去されて愈々獰猛に働いて來た。階下に執務する人達は先を爭ふて階上に馳せ登る、浸水は夫を追ふかの如く段一段と押寄せて來た。人の來往絶え、電話通せず、闇黑の天地には手合圖きかず、殘る唯一の喚聲の交通さへ家を毀ち樹木を倒す水響に些の用を辨じない。

驛構内の高い避難線に逃れた機關車は火室を水に襲はるゝに至つて救援を呼ぶ非常汽笛を鳴奏し續けて居た。肺腑をえぐる長短亂れ鳴く汽笛の起る邊りには、夫のみ白い水蒸汽が濛々と但黑の空に冲して居た。彼は焚火に浸水を蒙り暗黑、倒壞、叫喚怒號の喧騷裡に彼は兢々たる不安の一夜を過した

◇

も屋根瓦許りを水面に浮べて立ち並んで居た。其の瓦の上には多くの人が營々十數年漸く造り得た家

彼等には愈々迫つた秋が到來したのである。彼等はどうしても一時事務室を引揚げ各自の家を片付けに急いだ。僅か一時間有餘の間に彼の家の前栽は一尺六七寸程も增水を示し、門外の道路は溜滯の濁

關車は火室を水に沒はるゝに至つて救援を呼ぶ非常汽笛を鳴奏し續けて居た。肺腑をえぐる長短亂れ

鳴く汽笛の起る邊りには、夫のみ白い水蒸汽が濛々と暗黑の空に冲して居た。彼は焚火に浸水を蒙り行動の自由を失つた機關車乘務員の救助を喚んだが、今はその急に臨む一舟を呼寄せるにさへ儘ならぬのであつた。

暗黑、倒壞、叫喚怒號の喧騷裡に彼は兢々たる不安の一夜を過した

◇

翌早曉彼は陸軍々用船の中に在つて、恐しかつた昨夜の夢の跡を現實に視て居た。

彼の家も彼の周圍の人達の家々も屋根瓦許りを水面に浮べて立ち並んで居た。其の瓦の下には多くの人が營々十數年漸く造り得た家財が潜んで居る。某が珍藏して居た書畫、某が苦心蒐集した圖書、某が愛子のため造つた晴れの衣裳、某が飾り立てゝ居た美しい家具、あれもこれも一夜の內に汚穢の水の洗禮を受けて居る。夫れは餘りに殘酷な無慘な洗禮である。彼は其等を深く想ふべく彼の頭の弱きを感じた。

◇

彼は彼の周圍の人達と共に數日を殆ど不眠不休で働いた。彼等の頭には『孤立の京城を救へ』と云ふ考えより外何物もなかつた。彼等の希ふ處は『運輸交通機關の復舊』夫れ一つであつた。

其數日を經て彼は彼の家財總べてが異臭を放ちつつあるを知つた。彼は彼個人の損害が甚大なりし事を今日に至りて痛感して居る。然し彼は此事件の總べてを『水の脅怖』で解決して居る。

京城雜筆

住井氏論

西海漁郎

京城財界の人物中、三井物產の住井支店長は意見の最も豐富な一人であらう、三井支店長の椅子は、歷代出色の人が据つてゐる、前々の高野君は隨分思ひ切つた仕事をする手腕家であつた、そして大仕事をしてゐる割りに恍けた風を見せてゐた、前支店長の辻君は老成の人物で、三井支店長として鮮銀重役——當時は羽ぶりがよかつた——などよりも一目上に見られてゐた、その財界所見は常に水際立つてゐた、住井君は辻君や高野君に比し彼是一まわり以上若いであらう、物產社員の格として後輩であらう、細長い體軀の持主だが中々彈力のある性格を有してゐる、支那に永くゐた關係上對支所見の精透なのは御尤だが、大テイの問題には何か知ら興味を有し一種の意見を立てる人だ、それにいふ事が新らしい、恐らく聞いては見ぬが實業家に相違ない、殊に記者の君にあつて面白いと思ふのは人言を克く聞く事である、自分ばかりしやべつて對者に口を利かせぬ風が頭株に多い、然るに君は記者等の見解でも忠實に聞く寧ろ喜んで聞く風がある、口先ばかりかも知れぬが少なくも喜んで聞いてゐるやうに見へる、話し上手は必らずしも住井君に限らぬが聞き上手は京城でも君位の人は珍らしいそれから支店長としても個人としても頗る經濟家だともいふが、三井に限らず鈴木の澤村君にした處で、今日の財界としては經濟的にその委任社務をとつて行く事は避けがたい事で、何も君が好き好んで地道に地道にと地道を歩んでゐる譯でもあるまい、米に手を出せば米で、繭に手を出せば繭で、兎角三井物產といふ看板が問題になりうるさいと云ふてゐるらしい、さり乍ら問題になるのがうるさくては仕事は出來ぬ譯だ、多少の世評に臆する必要はない、三井として是なりと信じた所はドシ〳〵敢行すべしである。

◈三杯目の話

吉田莊一

この間、廣江氏と話して居ると、早大の一學生が、氏を訪ねて來る。

▲中野正剛氏の手紙をもつて居る

▲あけて見ると、

拜啓　この狀持參の竹若啓次郎小生宅に寄寓せる學生也、小生の家の者と同樣に御待遇といふに非す、心やすく食公仰せつけられ三杯目にはソット出さゞる程の御同情賴入候。

二人でブッと吹き出した、そして早速うちに招ぜられる▲本人は滿鮮見物に來たのである。

京城雜筆

相

永樂町人

それから人の聲に特種の注意を掃ふやうになつたが、なるほど、すぐれた高貴の響を有つ聲といふものは、たか〳〵ない。

○

犬養木堂翁に、しば〳〵お目にかゝつたは、十八九の時であつた。

當時翁五十前後、今とは違つて、はつきり智者型を、表徴して居た。

先生には、眼に感心した。

狼目といふが、決してそんな無氣味な眼でなく、それは叡智そのものゝやうな、美しい鳳眼だつた。

誰かの話に、明治になつて、鳳眼が三人あるといつて居た。

○

阪本金彌氏には、氏の全盛時代、四五年使はれて居た。

中江兆民翁が『この人、のち必ず名を成す可し』といつたので、先生非常に乘氣だつたが、僕はあの眼とあの顎とが氣にかゝつた。

眼は、白味が勝ち過ぎ、顎は顔全體と、比較のとれぬほど、小さい――そして後走的姿勢のものだつた。

同僚は、盲信してゐたが、僕は『晩年よろしからず』と確信して居た。

これだけは、的中した。

○

女の人では、三四年前、京城驛で立派な方を見うけた。

二十二三と思ふ。

厚手形といひたい方。

女の眼の細いのは、人相の方でこれを忌むといふが、その人も眼は細い方だつた、が、その細いところに、富貴、聰慧、仁愛――あらゆる福德を包含して、どこの誰だらうと、驚いたものだ。

○

それから一年ばかり後、今度は二三年にもなるかな、明治町を歩いてゐて、俥上で通る立派な紳士とすれ違つたのは――。

頭の格好、目、眉、鼻、顎――全く申分はない。

朝鮮に來てから、二十年にもなるが、初めて見る完美の相である。

私は、ぼかんとして、俥の後姿を見送つた。

○

それから二週間ばかりして、も一度本町で、同じ人と行き違つた。

あわてゝ同行者の肩を叩き『あの人だよ〳〵、君、あれは何といふ人だ』あまりせき込むので、同行者は面喰つた。

それが小林藤右衞門氏であつた。

○

私は、今でも小林氏の相を、崇拜して居る。

小林氏が金持であるか、賢者であるか、智者であるか、そんなことは知らぬが、あれほどの相は、一箇の藝術品としても立派なものだと確信する。

○

小林氏の顔を見ると、文章、詩、記傳を通して、想像して居た、唐宋の名臣、賢宰の面影が、私の胸の中に、うかんで來る。

○

それからこれはマダほや〳〵の話だが、二週間ばかり前、旭町の○○理髮店へ行つてると、そこへ俥で乘りつけた、四十五六の紳士――髮、額、鼻口のよく整つて居ること、血色の立派なこと、近ごろの發見であつた。

惜しいことに、當人がそこに居るので、名前を聞くわけには行かなかつた。

○

こんな話に、熟交の人を、もち出すのも如何と思はれるが、私は西崎氏のうしろ首に感心して居る。

首に感心すると、臺灣の土蕃らしく、西崎氏僕に警戒するかも知れんが、全くあのだるま首はいゝ。

○

前の丸山警務局長には、都合二度お目にかゝつたが、最初の時は實際びつくりした。

あれで、十四五年も經たれると支那の古本にある通り、すつかりそのまゝ『賢者型』になられる――めづらしい立派な形相を有つて居られると思つた。

○

もう故人になつたが、私の先輩今井巴堂氏が、當時鎭南浦の稅關長だつた有賀氏を評して『聲から行くと相位にのぼる人だ、相は聲より落ちる、由來臺閣に立つ人は聲に特種の風韻のあるものだ』と一晩、大講義を聞かされたものだ。

本町で會つた。

かといつて、奈良の正倉院にあるやうな彿像ぐさいのでもない。

六千萬人均しく喘いで居るのではないか。

京城雜筆

本町で會つた。

ダイブ見落ちはしたが、それでも何年來會て見ざる名貌であつた

○

斯う書くと、唯だ麗人……道具がそろつて居れば、いゝのだらうと取られるかも知れんが、そんなものぢやない、僕の見たやうな婦人は清方や深水の繪には全くない

說明は、實物を以てせねば……

世間の事

世の中には、世間といふものを蹈みたくツて、足蹴にかけて、自分だけは、わが儘して、一生をぬく〳〵と、暮らすものもある。

それかと思ふと、日夜氣兼し、且暮氣苦勞し、とう〳〵一生、いひたいことも口にし得ないで、空しく生涯を送つてしまふもある。

世間が勝つか、自分が勝つか、人間の一生は、强氣？弱氣？のふた路があるやうに見へる。

そして、こゝに一つの假定を立てるならば、とに角阿呆らしく感じても、威張つて世の中を渡る方が得策らしく思へる。

そして、世間は不思議に、强いものには讓步する、恐怖する、屈服する。

眞晝の月

木浦に住んで居るころ、家が小學校に近かつたので、よくその校庭を遊步したものである。

夏の月の美しい晩など、そこはいろ〳〵の人で、賑はつたものである。敎師の人々の夫人や、子持の會社員の細君や、そんな人達が遊動圓木の上などで、さま〳〵な物語りをし、時にはきやつ〳〵といつて騷ぐこともあつた。

校庭の大きい平面——その眞上にかゝる赤黃ろい夏の月、それは一つの印銘として、私の頭に殘つて居る。

けれど、忘れられないのは、その眞夏の晝の月である。

ポプラの葉蔭などから、何氣なく空を仰ぐと、溫錦洞の峯近く、例の雪白の大きい月が、淡碧の空にうつとりとかゝつて居る。

ぢーッと見上げると、向ふも步みをとどめて、ぢーッと見おろして居るやうにある。

——木浦を思ふごとに、私の一番忘れられない記銘である。

近頃の書信

このころ友人達と手紙のとりやりをしても、ちつとも面白くないのは、どうしたものだ。

いひ合せたやうに、生活の苦を述べて來る。

物の價を愁訴して來る。

子供がふえ、敎育費の負ひ目の重いことを、縷陳して來る。

殆んど一つとして、こつちの心を唱うせぬものはない。

しかし、考へて見ると、これが現代日本人の、眞實の生活相なのだらう。彼等は今、餓鬼道近くにかといつて、奈良の正倉院にあるやうな佛像くさいのでもない。

○

それッきり一二年、全くこの人とは合はない。

例の晶子や、雷鳥や、雛子や……そんな才女でないとしても、姿そのまゝ、面影そのまゝ、彼等の藝術に勝る藝術だつたと思ふ。

——何處へ行つてしまつたかな

六千萬人均しく喘いで居るのではないか。

二つのことを問うて見たい。

よその國民も皆斯くあるか。

わが國の賢者の力も、どうすることも出來ないか。——そしてわれ〳〵は畢竟濟はれないのかと。

◈南山北岳錄

吉田莊一

和田商銀は、銀行屋さんとなつても、昔を忘れぬ人である▲こゝは博士の美德として讃へてもよからう▲今、朝鮮の小說の國語譯をやつて居る▲これは從來のものが、あまりヒドイからである▲今一ツは、金剛山に關する各種資料の蒐集である、之は五六年もかゝつて居られる▲その他專門に關するもの二三……▲斯くて、博士はお宅にあつても、研究と執筆とに寧日ないらしい。

◈筆のしづく

平田久雄

京日のちやき〳〵に、河西君がある▲文章がうまい、酒がいける、腕力敢て御辭退申さぬといふ一騎當千▲この間政務總監に從て、北鮮に行く、同行上戶たるを知つて『サア一杯……』處が先生深く愼戒して『イヤ少し腸がわるい……』大に自重ぶりを發揮した▲かくて、任了へて京城に還る▲スルト多數の記者にかこまれた總監『諸君、僕の意見は、河西君が通信で書いた通り……』と來たので、先生喜ぶまいか、額をゴツンと叩き『フフ、どんなものだ』……無邪氣でいゝ▲處で、或人之を又聞きして『フーム總監もうまいなア』

ほこり叩き

朝鮮ホテル　伊藤龍

悲と笑

灯影淋しい裏路のかど、
佇み、なにごとか語る男女の姿、
塀越しの夫婦笑も風に送られ、
戀衣に觸れる秋の夜半。

お歸り

宵待ちの女房に
戯はゝる三毛猫も、
夫の靴音聞ゆると
座敷の隅にかしこまる。

嫁心

晴れて其日の丸まげも
人目恥らう初嫁御、
やがて、日當り欲しさの
物干臺。

初戀

添ひ遂げたいと胸に思へど、
打ち明けられぬ傷しさ、
知らず〳〵に語る眸の動き、
乙女心に宿る戀の芽。

四疊半

裏窓から洩れ聞ゆる
三筋の音、
恍とりと、寄り添ふか
主の膝側。

浪枕

あつさりと思ひあきらめよとは
世の常なれど、ならぬ竄氣地も、
わが身の家業。
添はれぬとは知りながら、
主が氣立も憎からず、
遂ぞ、三味の務めも忘れ果て
夢うつらに其日送りの左褄
獨り待つ

待てど訪る格子戸が氣にかゝる、
眠氣醒ましの南京豆、
がらり〳〵と開けられて、
障子の影、見すまして作る笑顔。

病褥

異士の獨り旅路に辿る君が身、
病みの褥に懼たわる、
憂い心、誘はるゝ痛ましさ、
若き乙女が胸よ、
猶更に迫る憐れを知る。

蛇に慣れたる男

默つて俯向いて下駄脱ぎ捨てゝ、
トン〳〵と、走りあがる梯子段。
訪る數も、日毎に二度、
蛇の話で、女中ども顫へる。
『こんど、お前等の蒲團の中へ

蛇を抛り込んでおくよ、
驚くだらう、ハ、、、、』と、
叫ぶ面持の凄さ。
蛇に慣れたる年若の男
懷中に蛇を抱き愛づるは常々、
名前を一郎さんとか云ふ、
世にも恐しい若人なる。
變態心理とは人の常に、
かけ離れたる技なるも、
蛇と親しみあるは感うたる、
怖しい男なる。
斯かる男に思ひ焦がられたら、
蛇の執念に擬へて突飛なる
憂き目の戀に悶へらるゝかも
計り難い。
なに心なく近接の折度重ぬれば、
戀ならざる交りが仇となり、
片戀の蛇男の執念にたじ〳〵と、
彼とても性慾を知る若人なる。

ほこりたゝいて寄せ集めて見たら愚と愚のかさね詩、誌上のけがれとは存じながら不取敢お送りする心持も可愛い所と見受けたい。（一九二五、八、二）

◈いろ〳〵帳

平田久雄

三井物産の天野さん、ゴルフは尋常一年生だが、謠は大分お手に入つて居る▲スグ目と鼻に居を構へて居るのが、南鮮日報河谷氏▲で天野さんが朗々とはじめると、河谷氏籐椅子を椽側に、そして徐ろに傾聽する▲『いかゞです』と訊くと『近頃非常な御進境で……兎に角私を、こゝまで誘惑されますからね』――なるほど二十貫の大男を誘惑するのはえらい▲醫界の名士で、金錢に無頓著なのは、池田（季雄）先生だらうといふ▲この人研究心が旺盛で、毎年内地に行く、各地の病院を視て廻る▲そして珍らしい器械などがあると、委細かまはず買つて來る▲兎に角よほど進歩的な頭の持主ださうな▲朝鮮に土著して居る畫家達は、一樣にさういつて居る『内地から何とも知れない旅繪師が來り、誰かの紹介で五十枚、八十枚の繪を賣つて行く、五十枚と見ても一千圓だ……』にも拘らず、此等の購求者が、土地の畫家を保護するといふ考へは、一つもない、これでは我々の前途甚だ心細い』と▲一隅尤もな話である▲諸君！土著者を愛撫してやれ。

る、同人一同茫然として居る、愕然として居る。

詩學古事抄錄

萬歲書閣主人　古城梅溪

仲連

齊の田單聊城を攻むゝらず、魯仲連乃ち書を爲り之を矢に約し以て城中に射て燕將に遺る、燕將書を見て泣くこと三日、遂に自殺す（史記）○仲連嘗て趙に遊ぶ、秦趙を圍んで而して魏の使趙をして秦を尊んで帝たらしめんと欲するに會す、連平原君を見て曰く君が爲め責めて歸さんと、使を見て曰く彼れ禮儀を棄て首功を上ぶの國也、其使を權使し其民を虜使す彼れ即ち帝たらば則ち連東海を踏んで而して死せん耳（同）

我書魯連書（李白）秦兵纔散魯連歸（同）齊有倜儻生。魯連特高妙（同）聊飛燕將書（子美）功成一箭魯連書（中行）郡人誰與魯連同（同）踏海魯連歸（同）生死離灰踏海心（同）一箭功成東踏海。乾坤若箇魯連狂（魏允中）誓同魯仲能飛箭（順之）仍留一隻箭。未射魯連書。（景明）知愛魯連歸海上（楊巨源）自是魯連東踏海、（元美）千金踏海稱達人（王儁）仲連一自踏東海。千載無人射燕將（用之）

編輯後記

雜筆同人

◎あて込んで居た寄稿家で、旅行せらるゝ向が多く、大分ごたゝ〳〵した。

◎公論石森氏などは、坐り込んで、書いてもらつた、漢銀李秘書役も、同樣である。

◎京電の見目さん、これも無理往生にたのみ込んで、一晩のうちに執筆してもらつた。

◎あとで聞くと、平壤の佐々木さん（東拓）瀨戸先生の急電で、びつくりして原稿を送つて來たのだとは、あゝいふ我儘な友達をもつた災難とあきらめるんですね。

◎鑛業會の德野氏が金剛山から西崎氏の原稿を、ことづかつて來たのもうれしい。慾をいへば、夫人や令孃の作も欲しいんだが。

◎西崎氏から社中を擧げて來いとの便りがあつた、一週間でも行つて見たいといふものと、こんな商賣をしてるのが因果だ、あきらめろ〳〵といふものがあつて、積極消極どつちとも方針がきまらぬ。

◎この間仁川に行くと、桑野さん、大平さん、眞鍮になつて世話してくれ『一度社中一所に來なさい、仁川の愛讀者大會を開き一日舟遊會でもやらう』……いつも乍ら親切なものだ、この方は近いので、不日行く事に速決可決してる。

◎唯今――八月二十五日午後二時、森悟一氏夫人永眠の悲報が來る、同人一同茫然として居る、愕然として居る。

次號原稿

十月號原稿は、九月十日締切ります、しかしそれ以前に一日でも早くお送り下されば、社の方は非常に助かります。

九月一日　編輯部

細工の御用は本町德力へ
電本三九三九
地金ノ御用ハ京城明治町德力本店出張所
電本一五二〇八八
京城德
金銀白金

大正十四年八月三十日印刷
大正十四年九月一日發行
一部定價金四十五錢
發行兼編輯人　京城府和泉町一六四　松本武正
印刷人　京城日報社　石川利夫
印刷所　京城府和泉町一六四
發行所　京城雜筆社
電話光化門三〇六

樂器と蓄音器

獨乙高級ピアノ
山葉ピアノ、オルガン
鈴木製
ヴアイオリン、マンドリン
獨乙製
ウアイオリン、マントリン
內外管樂器一切
內外蓄音器
內外レコード（日蓄、日東、內外ウインナー）
內外音樂書
樂器附屬品一切
運動具一式
（目錄無料進呈）

京城本町二丁目二十九

釘本洋樂器店

電話一二八三番

朝鮮語研究の指針

月刊

朝鮮語

一部金四十錢
定價

創刊十月一日發行

京城黃金町三ノ三〇

朝鮮語研究會

月刊—毎月十五日發行

京城廣告雜誌

發行所　市內舟橋町四三

京城府告雜誌社

月刊—毎月一日發行

朝鮮警察家庭新報

發行所　市內旭町一中島印所刷內

朝鮮警察家庭新報社

京城鍾路一丁目
濱洋服店
電話光化門二四四番

京城仁寺洞一三六

高橋法律事務所

辯護士　高橋章之助

電話光化門二五六番

京城府明治町二ノ一〇五

榎本法律事務所

辯護士
法學士　榎本　隆

（電話本局二八四四）

京城日報

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化生活に缺ぐべからざるものであります

德用大瓶小型振出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

京城府南大門通二丁目九七 九八

發賣元 富田商會

長電話本局三三〇九番
振替京城四五六八番

秋向背廣服
同オーバ
レインコート
新地質續々着荷
仕立念入り價格は安い
經濟的理想の既製品頗る豐富
▲御注文に應じ特製仕候
京城鍾路一ノ一九
角田洋服店
電話光化門九五五番
振替京城一八四三番

朝鮮商工株式會社

本社　鎭南浦三和町

京城黃金町三丁目

朝鮮教育普成株式會社

社長 高橋章之助

電話本局一九四八番

振替京城四六二七番

◎銘仙と
毛糸◎

京城本町
ちゝ姫や

堀内滿輔

電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

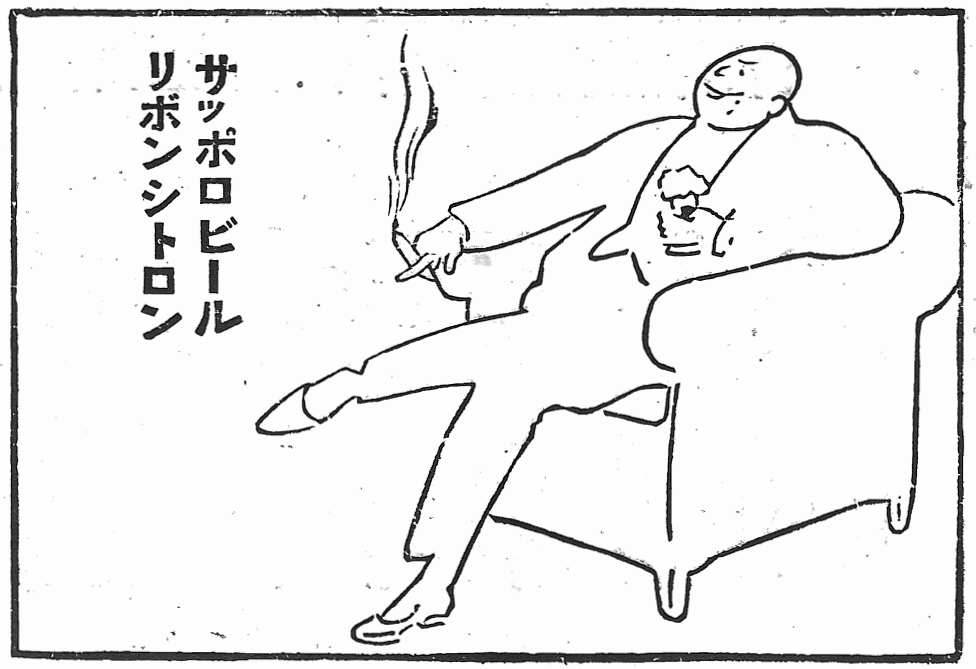
金剛山産松實松花應用菓

金剛飴

金剛柏子（松の實鹽炒り）
金剛柏子菓（朝鮮式松の實菓子）
金剛おこし
金剛しるこ

金剛煎餅
金剛山
金剛羊羹
金剛饅頭

京都市二條城本町二丁目
電話二十七番
本局四七五番
亀屋商店



京城雜筆（第七十九號）

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十四年九月一日發行（毎月一回一日發行）